福祉系大学経営者協議会

ソーシャルワーカーの“声”
プロジェクト
第２次派遣報告書

平成 25 年 3 月

ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト 第２次派遣報告書発行に寄せて

福祉系大学経営者協議会
会長　島　田　燁　子

福祉系大学経営者協議会は、福祉系大学の経営に携わる責任者（理事長・学長）が一堂に会して、社会福祉専門職の社会的地位の向上、社会福祉についての社会的認知の向上、日本の社会を支える社会福祉人材養成教育の発展等を推進することを目的として2009年6月29日に設立されました。現在、全国の20校の大学が加盟しています。これまで「ソーシャルワーカーデー中央集会」の開催、福祉専門職の資質向上・就労条件の改善等に対する取組みについての研究会開催、社会福祉士国家試験対策における各大学の実態調査及び研究と関係機関に対する提言、就職支援担当者・入試担当者の情報交換会の開催、社会福祉専門職教育の充実や社会福祉専門職の地位向上につながる要請事項を取りまとめて国及び地方公共団体等へ必要な要請行動を行うなどの活動、そして東日本大震災の被災地復興支援活動を行ってきました。

東日本大震災の被災地の復興に向けて私たち協議会に「何ができるのか」、またソーシャルワーカーを養成する私たちふさわしい「支援」の在り方について、関西福祉科学大学の遠藤洋二准教授を委員長に指名して検討をいただきました。その結果、この「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」「学生“語り部”プロジェクト」が考案されました。これは、私たち協議会に加盟する大学の学生と指導教員がチームを組み、東北の被災地で活躍するソーシャルワーカーにスポットを当てインタビューを行い、その活動内容や苦労談、成功談、失敗談、いま必要なこと、改善すべきことなどを聞き取り、またそこで知ることができた状況を持ち帰ってさらに多くの方々に伝えていくというものです。被災地で活動するソーシャルワーカーに対する後方支援です。被災地で活躍するソーシャルワーカーの活動内容をまとめ報告書・インタビュー集などをアーカイブとして残し、全国に発信することで次の支援活動につなげるとともに、ソーシャルワーカーの後進育成をも期していきます。

第1次のパイロットプランに続いて、今回の第２次派遣は、淑徳大学、日本社会事業大学、中部学院大学、文京学院大学、日本福祉大学、関西福祉科学大学の６校が参加し、学生と指導教員がチームを組んでいよいよ本格的な活動が行われました。プロジェクトは、各県の社会福祉士会との連携により、入念な事前学習、被災地での講義、オリエンテーション、インタビュー、グループ討議、ミーティング、反省会、報告書の提出、取りまとめというように進行していきます。今回は、岩手県、宮城県で行われました。この報告書を読む皆様に、このプロジェクトで多くのことを学んだ学生たちの様子を知っていただき、現地で活躍するソーシャルワーカーの実際の声を聞いていただきたいと思います。

末筆ながら、インタビューに応じていただいたソーシャルワーカーの皆様、各県の社会福祉会の皆様、ご講義をいただいた先生方、ご引率いただいた指導者の皆様、ご協力いただいた全ての関係者の皆様に紙面をお借りして心より厚く御礼を申し上げます。

も　く　じ

Ⅰ　事業の概要　・・・・・・・・・7

Ⅱ　「ソーシャルワーカーの”声”プロジェクト」　第2次派遣　・・・・・・・・・10

Ⅲ　報告集

【岩手県】

◆座学　**事前学習　1次派遣メンバーによる報告会**

2012年6月22日　関西福祉科学大学　辻　佑佳里　・・・・14

◆座学　**事前学習　東北大震災と被害状況について**

2012年7月6日　関西福祉科学大学　白鳥実葉　・・・・15

◆座学　**事前オリエンテーション**

2012年8月2、7日　淑徳大学　安川紗代　・・・・16

◆座学　**事前学習　プレ・インタビュー**

2012年8月13日　関西福祉科学大学　西岡なつみ　・・・・17

◆座学　**事前学習**

2012年8月20日　中部学院大学　大藪元康　・・・・19

◆座学　**オリエンテーション**

2012年8月21日　関西福祉科学大学　白鳥実葉　・・・・20

◆座学　**オリエンテーション**

2012年8月21日　淑徳大学　大木達也　・・・・21

◆座学　**オリエンテーション・講義「岩手県社会福祉士会の取り組み」**

2012年8月21日　中部学院大学　石川智也・古川友子　・・・・22

◆講義　**岩手県社会福祉士会の取り組み**

2012年8月21日　日本社会事業大学　飯田祐貴　・・・・25

◆講義　**岩手県社会福祉士会の取り組み**

2012年8月21日　淑徳大学　安川紗代　・・・・26

◆視察　**岩手県陸前高田市**

2012年8月22日　淑徳大学　小野田優香　・・・・27

◆視察　**岩手県陸前高田市**

2012年8月22日　関西福祉科学大学　古根川和貴　・・・・29

◆視察　**岩手県陸前高田市～釜石市**

2012年8月22日　日本社会事業大学　野澤千明　・・・・31

◆視察　**岩手県釜石市**

2012年8月22日　淑徳大学　桝田綾子　・・・・33

◆その他　**グループ討議**

2012年8月22日　関西福祉科学大学　古根川和貴　・・・・35

◆その他　**グループ討議**
2012年8月22日　中部学院大学　石川智也・古川友子　・・・・36
◆その他　**グループ討議・インタビュー方法の確認**
2012年8月22日　淑徳大学　桝田綾子　・・・・38
◆インタビュー　**障がい者支援施設　吉浜荘**
2012年8月23日　関西福祉科学大学　辻　佑佳里　・・・・39
◆インタビュー　**就労継続支援Ｂ型事業所　青松館**
2012年8月23日　日本社会事業大学　佐藤茉奈　・・・・41
◆インタビュー　**特別養護老人ホームＢ**
2012年8月23日　淑徳大学　安川紗代・小野田優香　・・・・43
◆インタビュー　**チャレンジドまちかど相談室“リンク”**
2012年8月23日　中部学院大学　廣野美月・小川侑希・石川智也　・・・・45
◆インタビュー　**大槌町地域包括支援センター**
2012年8月24日　日本社会事業大学　中橋欣子　・・・・50
◆インタビュー　**宮古市社会福祉協議会**
2012年8月24日　関西福祉科学大学　白鳥実葉　・・・・53
◆インタビュー　**釜石市保健福祉部高齢介護福祉課 地域包括支援センター**
2012年8月24日　中部学院大学　古川友子・石川智也　・・・・55
◆インタビュー　**Ｂ町社会福祉協議会**
2012年8月24日　淑徳大学　桝田綾子・大木達也　・・・・59
◆その他　**インタビューを終えてのミーティング**
2012年8月24日　中部学院大学　小川侑希・廣野美月　・・・・61
◆その他　**反省会**
2012年8月24日　淑徳大学　大木達也　・・・・63
◆その他　**まとめ**
2012年8月25日　中部学院大学　小川侑希・廣野美月　・・・・64
◆その他　**グループ討議**
2012年8月25日　関西福祉科学大学　西岡なつみ　・・・・68
◆その他　**グループ討議**
2012年8月25日　淑徳大学　小野田優香　・・・・70

【宮城県】
◆座学　**宮城県社会福祉士会の取り組み**
2012年9月3日　文京学院大学　石井友里　・・・・72
◆座学　**宮城県社会福祉士会の取り組み**
2012年9月3日　日本福祉大学　竹倉文恵　・・・・73
◆視察　**宮城県東松島市、南三陸町他**
2012年9月4日　文京学院大学　榊原　香　・・・・74

◆視察　**宮城県東村松市大曲地区、南三陸町**
2012年9月4日　日本福祉大学　上　野　莉　恵　・・・・76
◆インタビュー　**仙台市向陽台地域包括支援センター**
2012年9月5日　文京学院大学　木　村　恵　理　・・・・78
◆インタビュー　**せんだんの里**
2012年9月5日　日本福祉大学　星　野　真　希　・・・・80
◆インタビュー　**多賀城市役所社会福祉課障害福祉係**
2012年9月6日　文京学院大学　棚　田　恵里花　・・・・82
◆インタビュー　**泉区中央地域包括支援センター**
2012年9月6日　日本福祉大学　鈴　木　秀　明　・・・・84
◆その他　**グループ討議**
2012年9月7日　日本福祉大学　竹　倉　文　恵　・・・・87

Ⅳ　学生コメント
関西福祉科学大学　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
淑　徳　大　学　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
中部学院大学　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
日本社会事業大学　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
日本福祉大学　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
文京学院大学　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94

Ⅰ　事業の概要

１．福祉系大学経営者協議会「東日本大震災復興支援プロジェクト」について

福祉系大学経営者協議会は、福祉系大学の経営に携わる責任者が一堂に会し、社会福祉専門職の社会的地位の向上、社会福祉についての社会的認知の向上、日本の社会を支える社会福祉人材育成教育の発展等を推進することを目的として、平成 21 年 6 月に設立され、全国の福祉教育を実施する 20 大学が加盟している。

福祉系大学経営者協議会においても、東日本大震災に対する取り組みを行うべく、東北福祉大学・淑徳大学・中部学院大学・龍谷大学・関西福祉科学大学（委員長校）で構成される「復興支援委員会」を立ち上げ、「復興支援に関して何ができるか」を協議することとした。

２．コンセプト（基本的な考え方）

①将来の社会福祉を担う「人材育成」という福祉系大学のミッション
②福祉系大学が持つ「社会福祉に関する専門知識」
③「全国各地の大学」が参加する全国的発信力
等、福祉系大学経営者協議会の設立理念、団体の特徴を生かしたプロジェクトとする。

⇩

災害支援における社会福祉専門職（ソーシャルワーカー）に焦点をあてたプロジェクト

３．テーマ・目的

ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト
（災害支援におけるソーシャルワーカーの活動を記録する）

ソーシャルワーカーが災害時に「何ができるのか」、「何をすべきなのか」などを、実際に災害支援活動に従事ソーシャルワーカーから学生が聴き取り、記録として残す。

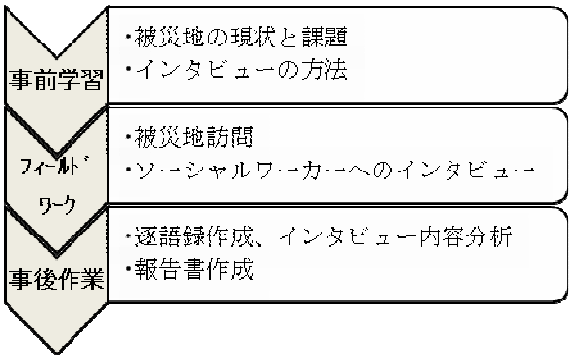
⇩

学生“語り部”プロジェクト
（ソーシャルワーカーの”声”を発信する）

ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」で聴き取った内容を整理し、講演や出版物などを通じて発信する。

4．プログラム

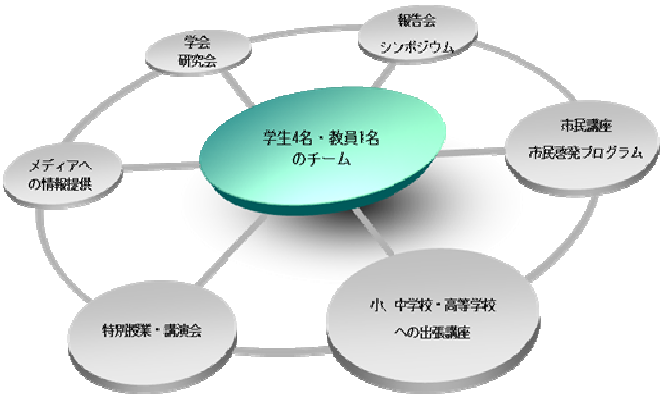
（1）ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト



・学内で一定のトレーニングを受けた学生4名と教員1名がチームを編成し、1週間程度被災地に入り、被災地の現状を理解すると共に、現地で活動するソーシャルワーカーにインタビューを行うなど、フィールドワークを実施する。

・フィールドワークの成果をまとめ、その内容をチームで分析し、インタビュー内容とともに報告書にまとめる。

（2）「学生“語り部”プロジェクト」



「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」に参加したチームが、学内外において広報活動を行う。

また、直接支援の実施を検討している機関、団体等に、要援護者および支援者であるソーシャルワーカーのニーズに関する情報を提供することで、支援とニーズのミスマッチを緩和する。

5．ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト　参加大学

①　：第1次派遣（パイロット事業）（宮城県　平成24年3月12日～17日）
②　：第2次派遣　（岩手県　平成24年8月21日～25日）
③　〃　（宮城県　平成24年9月3日～7日）
④　：第3次派遣（予定）　（宮城県　平成25年3月3日～7日）

参加プロジェクト			大　学　名
1次	2次	3次	
	②	④	淑徳大学
	②	④	中部学院大学
①	②	④	関西福祉科学大学
①	③		文京学院大学
	②		日本社会事業大学
	③		日本福祉大学

６．本プロジェクトを起点とした展開

本プロジェクトはソーシャルワーカーの声を記録し、発信することを目的としているが、参加した学生や教員が中心となり、以下のような展開が考えられる。

①要保護者への直接支援

ソーシャルワーカーの視点から被災者の生活（生活再建）課題を明らかにし、「学生”語り部”プロジェクト」により広く地域社会に伝えることで、学生、教員など大学関係者をはじめ、外部の機関、団体による直接支援に結びつける。

②ソーシャルワーカーへの後方支援

「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」での聴き取り内容を分析し、災害支援活動における問題点や課題を整理し、ソーシャルワーカーへの後方支援策を模索する。

③次代のソーシャルワーカーの育成

ソーシャルワーカーとして災害支援を行う際に必要な知識や技術について理解し、講座やワークショップを通じて、大規模災害・事故等で機能するソーシャルワーカーを育成する。

Ⅱ　「ソーシャルワーカーの”声”プロジェクト」　第２次派遣

１．目　的

大規模災害時、ソーシャルワーカーが「何ができるのか」、「何をすべきなのか」などを、災害支援活動に従事したソーシャルワーカーから学生が聴き取り、ソーシャルワーカーの“想い”も含めて記録として残すことを主な目的とする。

２．概　要

学生４名（程度）と教員１名がチームを編成し、１週間程度被災地に入り、その現状を理解すると共に、現地で活動するソーシャルワーカーにインタビューを行うなど、フィールドワークを実施する。

また、フィールドワーク実施後、その成果を報告書・インタビュー記事にまとめる。

３．期　間

事前学習	：	平成 24 年 7 月上旬～8 月上旬
フィールドワーク	：	【岩手県】平成 24 年 8 月 21 日（火）～8 月 25 日（土）
		【宮城県】平成 24 年 9 月 3 日（月）～9 月 7 日（金）
事後作業	：	平成 24 年 10 月～11 月

４．参加校（参加チーム）

関西福祉科学大学、淑徳大学、中部学院大学、日本社会事業大学、日本福祉大学、
文京学院大学（各１チーム）

５．プログラム

（１）事前学習（各大学）

（２）フィールドワーク

①拠点（宿泊場所）

【岩手県】

いこいの村岩手

〒028－7113　岩手県八幡平市平笠 24－1－4

電話：0195-76-2161　　FAX：0195-76-2165

HP：http://www.ikoi-iwate.co.jp/

【宮城県】

東北自治総合研修センター

〒981-3341　宮城県黒川郡富谷町成田二丁目 22－1

電話：022-351-5771　　FAX：022-351-5773

HP：http://www.thk-jc.or.jp/

②スケジュール

【岩手県】

日　　程		内　　容	実施単位
8月21日 （火）	夕方	「いこいの村岩手」集合	各チーム
		・オリエンテーション ・講義：岩手県社会福祉士会事務局長　佐々木裕彦氏 「岩手県社会福祉士会の取り組み」	合同
	夜間	交流会	合同
	宿泊	「いこいの村岩手」	―
8月22日 （水）	午前～ 午後	激甚被災地視察 （釜石市・陸前高田市等）	合同
	夜間	合同ミーティング ・グループ討議 ・インタビュー方法の確認	合同
	宿泊	「いこいの村岩手」	―
8月23日 （木）	終日	・インタビュー実施地への移動 ・インタビュー実施地域視察・データ収集 ・ソーシャルワーカーへのインタビュー①	各チーム
	宿泊	各チームが手配	―
8月24日 （金）	終日	・インタビュー実施地への移動 ・インタビュー実施地域視察・データ収集 ・ソーシャルワーカーへのインタビュー②	各チーム
	夕方～ 夜間	「いこいの村岩手」帰着	各チーム
	夜間	合同ミーティング ・反省会	合同
	宿泊	「いこいの村岩手」	―
8月25日 （土）	午前	合同ミーティング ・グループ討議 ・フィールドワーク総括 ・事後作業の確認	合同
		解散	各チーム

【宮城県】

日　　程		内　　容	実施単位
9月3日 （月）	夕方	「東北自治総合研修センター」集合	各チーム
		・オリエンテーション ・講義：宮城県サポートセンター支援事務所長　鈴木守幸氏 「宮城県社会福祉士会の取り組み」	合同
	夜間	交流会	合同
	宿泊	「東北自治総合研修センター」	―
9月4日 （火）	午前～ 午後	激甚被災地訪問 （東松島・南三陸等）	合同
	夜間	合同ミーティング ・グループ討議 ・インタビュー方法の確認	合同
	宿泊	「東北自治総合研修センター」	―
9月5日 （水）	終日	・インタビュー実施地への移動 ・インタビュー実施地域視察・データ収集 ・ソーシャルワーカーへのインタビュー①	各チーム
	夜間	反省会	合同
	宿泊	「東北自治総合研修センター」	―
9月6日 （木）	終日	・インタビュー実施地への移動 ・インタビュー実施地域視察・データ収集 ・ソーシャルワーカーへのインタビュー②	各チーム
	夕方～ 夜間	「東北自治総合研修センター」帰着	各チーム
	夜間	合同ミーティング ・反省会	合同
	宿泊	「東北自治総合研修センター」	―
9月7日 （金）	午前	合同ミーティング ・グループ討議 ・フィールドワーク総括 ・事後作業の確認	合同
		解散	各チーム

Ⅲ　報告集

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　辻佑佳里
分類	座学
プログラム名	事前学習　1 次派遣メンバーによる報告会
日時・場所	2012 年 6 月 22 日　関西福祉科学大学
講師・インタビュー対象者	

復興プロジェクト 1 次派遣の先輩達が、これまでプロジェクトに参加してきて学んだことや感じたことについての報告を受けた。私たちは、被災地に行くまでに身に付けるべきことを学ぶ機会として、また 1 次派遣の先輩方と情報を共有するために報告会に参加した。

報告会では、まず最初に写真等を用いながら被災地の状況について説明が行われた。その中には、目を背けたくなる写真がいくつも流された。これらの写真をみる中で、今の私に一体何が出来るのか分からない気持ちになり、先輩達が何度もおっしゃられた「圧倒的な無力感」という言葉が私の頭の中を過った。震災から 1 年がたち、以前と比べニュースなど震災についてほとんど取り上げられなくなってきている中で、薄れつつあった私の感情が一気に込み上げた。風化させてはいけない、そのためにもこのプロジェクトはあるのだと感じた。

また先輩たちの報告を受けて、ワーカーの活動や彼らの思いがメディアなどで取り上げられることがほとんどないこと、またワーカー自身も一人の被災者であることを改めて痛感させられた。インタビューを受けてくださるソーシャルワーカーの方々の気持ちを十分に考えた上で、インタビューに臨む必要があると感じた。

最後に、先輩たちのグループ討議が行われた。その中では、先輩たちそれぞれの目線から捉えられたこのプロジェクトの意味について語られた。そしてこの討議を聴く中で、私はこのプロジェクトに参加させて頂いていることを誇りに思うとともに、私自身が担うべき役割が分かったような気がした。社会的に意味のある、このプロジェクトに貢献出来るように精一杯努めたいと思う。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　白鳥実葉
分類	座学
プログラム名	事前学習　東北大震災と被害状況について
日時・場所	2012 年 7 月 6 日　関西福祉科学大学
講師・インタビュー対象者	

今回の事前学習では、DVD を通して被災時の状況を確認した。それは、実際に被害に遭われた方が高台やビルの上からの撮影を行った映像であった。そこには、津波が押し寄せる様子が生々しく映し出されていた。波が押し寄せ、車を押し流し、家までも流してしまうその光景はビデオを撮影された方の音声とともに流れた。その声からは、大きな動揺と驚愕が読み取れ、災害の大きさを改めて感じさせられた。今まで普通に暮らしていた場所が津波によって飲み込まれていくというのは、私たちには想像も出来ないような出来事であるということをありありと映し出されていた。映像を見て、改めてこの震災を伝えていくことの必要性を感じた。

また今回の事前学習は、岩手への派遣に向け現地の地理についても学ぶ機会でもあった。白地図の地名が空欄になっており、それを前に置かれた資料を活用し埋めていくというものであった。地図を用いて被害にあった地区を確認し、岩手県の市町村の位置を確認し、現地視察・インタビューの備えとした。大まかにでも地理が分かることで、お話を伺うときにもイメージしやすくなるということで、特に海岸部の地理を重点的に記憶した。今までニュースでなんとなく聞くよりも、位置関係がはっきりすることでより明確に被害の状況が見えやすくなったように感じた。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　安川紗代
分類	座学
プログラム名	事前オリエンテーション
日時・場所	2012 年 8 月 2、7 日　淑徳大学
講師・インタビュー対象者	淑徳大学　稲垣美加子氏、長谷川俊哉氏、伊藤千尋氏

2012 年 8 月 2 日と 8 月 7 日に大学で事前オリエンテーションが行われた。

8 月 2 日は、今回の東日本大震災復興プロジェクトの目的と、稲垣先生からのソーシャルワーカーの災害支援について講義を受けた。

まず、今回のプロジェクトというのは、被災地に行って力仕事などをするボランティアの様な、直接的な支援ではないということ、またソーシャルワーカーの仕事というのがどういうものなのか、そして今回の震災が起きた時に、ソーシャルワーカーは何をしてきたのかというのを、全国の人に伝えていくことが今回のプロジェクトの目的であるということを確認した。

稲垣先生の講義では、まず「現地のソーシャルワーカーは、ワーカーでもあり、同時に被災者である」ということを心に留めておくようにと言われた。また、ボランティアが一歩間違えてしまうとエゴになってしまうことや、今必要なことを見極める力がとても大切なこと、何が求められているのかを全く考えないで被災地に行くことが、被災地の人に対してどれだけ失礼なことであるのかなど、先生の講義を受けたことによって、今回の震災を様々な角度から見ることができた。

インタビューの経験が一度もない私たちに、本当にインタビューができるかとても不安だったけれど、先生が講義の時に言ってくれた「誠実にしっかりと取り組んでいけば、相手にも伝わるはずだから」という言葉を忘れずに、プロジェクトの目的をしっかり果たしつつ、その中で自分を成長できるようにがんばろうと強く思った。

8 月 7 日は、実際に岩手に行くメンバー（教員 1 人、学生 4 人）で、今回のプロジェクトのインタビューでソーシャルワーカーに何を聞きたいのかを学生中心で話し合った。

インタビューの項目は、事前に大まかに決められていたものがあったので、それを参考にしつつ、自分たちが何を聞きたいのかというのを中心にインタビュー項目を決めていった。

しかし、どの地域でどのような機関で働いているソーシャルワーカーにインタビューをさせていただけるのか、この時点では情報がなかったので、大まかな質問を決めて、インタビューに協力してくれるソーシャルワーカーの情報が得られてから、新たに質問を決めていく形にした。

自分たちが「聞きたい」と思ったことを直接ソーシャルワーカーに聞くことができる貴重な機会であると同時に、言葉ひとつ間違ってしまうだけで、全く違う意味になってしまったり、失礼な質問になってしまったりする難しさも痛感した。しかし、誰かにやらされているのではなく、自分たちで作り上げていくことが今回のプロジェクトの目的であるということをメンバー全員が思っているせいか、「自分はこう思う」とか「この質問はこういうふうに聞きたい」など一人ひとりが積極的に発言してインタビュー項目を決められたのはとても良かったと思う。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　西岡なつみ
分類	座学
プログラム名	事前学習　プレ・インタビュー
日時・場所	2012 年 8 月 13 日　神戸市六甲道勤労市民センター
講師・インタビュー対象者	神戸市東灘区役所保健福祉部　保護係長　石原隆司氏

石原氏は約 8 年間児童相談所の一時保護所で児童指導員を経験し、福祉事務所で生活保護のケースワーカー4 年、児童相談所で児童虐待の対応係長 4 年、そして現在の区役所で生活保護のスーパーバイザー係長に就いて 3 年目である。阪神・淡路大震災が起きた時は児童相談所の一時保護所に勤めて 1 年目であった。

石原氏は、自宅で出勤する準備をしている最中に地震にあった。何が起きたのか全体像が全く分からないまま、とにかく職場に車を走らせた。到着した一時保護所では、子どもと宿直の職員がグラウンドの遊具の下に避難していた。「これからどうしよう？今晩子どもをどこで寝かせよう？」というのが石原氏の第一印象であった。その後、近場に住む職員 3、4 名が集まってきたものの電話が繋がらず、市役所全体の機能が停止しているため、自分たちは何をすればよいのか分からなかったそうだ。そこに断片的な指令が入ってきたため、石原氏は職員を集めて大阪から届く物資の布団を取りに行ったり、コープから届いた食料を北区へと届けに行ったりと丸 1 日奔走した。

2、3 日目から石原氏は、王子公園の陸上競技場にて自衛隊がヘリコプターで運んでくる物資を運び出す作業や、災害義援金の配布、そしてその会場整備を行った。場内には罹災証明を手にする人で溢れており、住宅の全壊、半壊など損壊の程度によって支給額が異なるため「いくら義援金が貰えるか」と喧嘩のような状態だったらしい。

親御さんと連絡が繋がった一時保護所の子どもたち 7～8 名は親元へ帰し、残りの子どもたちは 2 日目、被害がなかった児童養護施設へ間借りする形で引っ越し、全員で一緒に生活を送った。その子どもたちも 10 日ほどで親に引き渡すか、正式に他の児童養護施設に措置した。子どもに関する問題は震災から 1 カ月ほど経ってからクローズアップされ始め、その頃から児童相談所の本来的な相談ニーズが発生し始めた。そのため 3 月には空いている児童自立支援施設を借りて仮設の一時保護所を開設し、本来業務に戻った。そして翌年 4 月には改修が終わり元の一時保護所に戻った。

震災当時、石原氏の父親は須磨区の福祉事務所の課長をしていた。当時の震災マニュアルによれば、保護課は遺体安置所の設置が担当になっていた。そのため石原氏の父親は、遺体を運び遺体を拭いて、棺を組み立てる作業を毎日行っていた。石原氏はその事実を知り、「ポジションも年齢も上の父親こそが自分の行ったような臨機応変さや計画性が必要とされる仕事を担当するべきだったのではないか」と感じたそうである。

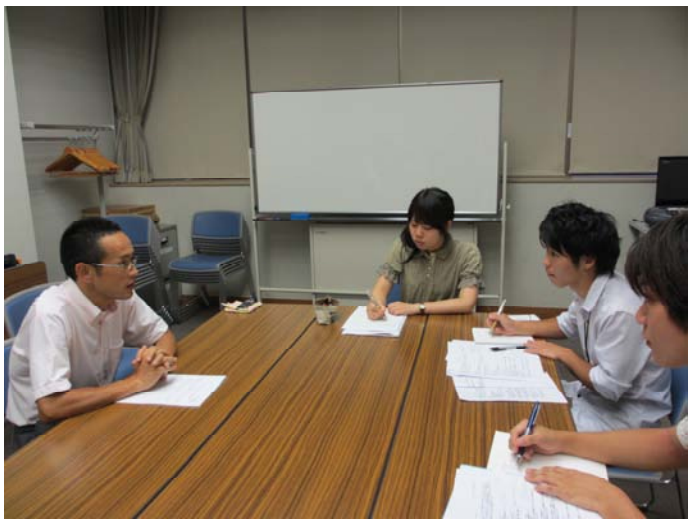
震災直後、さまざまな支援部隊、聞き取り調査、専門機関、大学が被災地へと入って来た。その際、支援者、調査者の泊まる場所の確保や、食事の手配を被災者が行い、実質“被災者が支援者を支援する”という事態になっていた。そのせいで被災者がどれだけ疲弊したかは計り知れない。

被災経験をもとに現在神戸市ではマニュアルが改変され、遠方から通う職員は自分の職場では

なく、自宅から近い区役所に行って初動の指揮を取るようにすること、必要な物資の情報は被災地の外で集約し、連絡、調整、手配をしてもらうことにより被災地での本来業務を可能にすること、ボランティアを募集する前にまずボランティアセンターを立ち上げ、ボランティアを受け入れる体制を作るための職員を派遣することなど、自分たちの教訓を得てより効率的に設定されている。

また石原氏らは震災を経験したことにより、「1ヶ月後、1年後どうなっているか？」と長いスパンでの支援方法を考えることができるようになったらしい。東日本大震災では、地震が発生した時点で建設業者に仮設住宅を建てるために働きかけたり、仮設住宅の候補地を考えたり、1ヶ月後には避難所の人たちへ仮設住宅の募集をかけることを想定したりと迅速に動くことができたそうだ。

「普段からそうであるが震災時は特に、自分のできる限界を先に把握しておくことが大切である」と石原氏は語った。当事者は目の前のことしか見えず、自分の判断が間違っているかもしれなくても、迷っている暇などない。そんな時に背中を押してくれる存在が重要で、それは当事者ではなく、かつ身近で状況を把握している人間でなければならない。その意味で普段から縦横の繋がりを持っておくこと、いかにそれぞれの業務分担を軽減できるかが大切であるそうだ。上は下の負担を減らし余裕を持たせてあげれば、下は考えるゆとりができ、上から現場、地域の声が拾い上げることができ、施策に反映していけるからである。



また本インタビューを通して「東日本大震災の当事者たちは自分たちのことを『何もできていない』と言うかもしれないが、阪神淡路大震災を経験した我々が『私たちの時はそこまで支援できていなかった、立派なものだ』と声を掛けることが、もしかしたら励みになるかもしれない。そう思うと、そのような後方支援もしないといけないかもしれない」と石原氏自身も気付いたそうだ。

今回石原氏から話を伺い、阪神淡路大震災での経験や反省をもとにして東日本大震災におけるボランティアや仮設住宅などの支援が行われていることが分かった。震災を経験した人々の語る言葉が被災地で活動する人々の励みとなるのであれば、今回のプロジェクトでソーシャルワーカーの想いを記録として残し、発信するということは非常に意義深く、確実に後方支援に繋がると考える。

作成者（大学名・氏名）	中部学院大学　大藪元康
分類	座学
プログラム名	事前学習
日時・場所	2012 年 8 月 20 日
講師・インタビュー対象者	

１．当該プロジェクトの全体像を確認した。

「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」と「学生“語り部”プロジェクト」の 2 つからなり、被災地でのソーシャルワークについて、インタビューを行い、まとめ、伝えていくことであることを確認した。

参考資料

・「遠藤洋二氏にきく」(川島恵美編著(2011)「川島ゼミ版　二十歳のころ 09」関西学院大学出版会出版サービス，p47-59)

・「福祉系大学経営者協議会　ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト　パイロット事業報告書」関西福祉科学大学，2012 年 6 月

２．陸前高田市及び釜石市（大槌町）でのインタビューにあたり、入手可能な資料をもとに、事前学習を行った。

使用した資料：

・NHK 特集（一部視聴し、残りは各自視聴することとした。）

・朝日新聞

・近江雅喜氏が登壇されたシンポジウム資料

・岩手県地図

３．インタビューに際して、留意する事項について確認をした。

インタビュー項目については、4 チームで共通の事項があること、インタビューについては、「項目順」ではなく、話の流れの中で、これらの項目が網羅されるようにインタビューすることを確認した。

４．インタビュー時の役割分担を行った。

・8 月 23 日、チャレンジドまちかど相談室“リンク”　相談支援専門員　近江雅喜氏へのインタビューに際しては、

石川君、古川さんがインタビュアー

小川君、廣野さんが記録係

・8 月 24 日、釜石市保健福祉部高齢介護福祉課　地域包括支援センター　千菅英理子氏へのインタビュー　に際しては、

小川君、廣野さんがインタビュアー

石川君、古川さんが記録係

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　白鳥実葉
分類	座学
プログラム名	オリエンテーション
日時・場所	2012 年 8 月 21 日　いこいの村岩手
講師・インタビュー対象者	

プロジェクトの初日、このプロジェクトをスタートするにあたって、まずオリエンテーションが行われた。オリエンテーションでは、各大学メンバーの簡単な自己紹介の後、一次派遣のメンバーが作ったムービーの視聴を行った。ムービーを通してプロジェクトの概要や目的を再確認するとともに、私たちが、これから行おうとしていることについて思いを新たにすることが出来た。

その後、遠藤先生からお話を伺った。遠藤先生は、1994 年に起こった阪神淡路大震災をソーシャルワーカーとして体験されていた。その経験から当時の大災害を前に味わった「圧倒的な無力感」、「我々にいったい何が出来るのか」という葛藤があった事を語ってくださった。また「被災後、様々な情報がメディアなどを通して発信されているがソーシャルワーカーの活動が取り上げられることはない。ソーシャルワーカーは、災害時には何も出来ないのだろうか。そうではない。ソーシャルワーカーは、災害時に本当に大きな役割を果たし、人々を支援している。」と力強く語られた。被災した状況の中でも、ソーシャルワーカーはその専門性と誇りを持って働いておられる。そのことを再確認させられた。そしてソーシャルワーカーが被災時にどのように活動し、どのような役割を担ってきたのか、このプロジェクトを通して伝えていくということの必要性を改めて感じることができた。学生の私たちだからこそ出来ることがある。遠藤先生は、学生にしか出来ない形でソーシャルワーカーの声を集め、発信していってくれることを期待しているとも語ってくださった。

最後に一次派遣で宮城県に行かれた先輩の話も聞かせていただいた。学生にしか出来ないことが必ずあるということや現地のソーシャルワーカーに「話を聞いてくれてよかった」と言われた経験を語ってくださった。

この現地での最初のプログラムであるオリエンテーションを通して、自分自身の中で、このプロジェクトについてその意義を改めて見つめ直し、これからの岩手での５日間、その後のソーシャルワーカーの声を伝えるという働きについての責任を感じた。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　大木達也
分類	座学
プログラム名	オリエンテーション
日時・場所	2012 年 8 月 21 日　いこいの村岩手
講師・インタビュー対象者	関西福祉科学大学　松宮満氏、遠藤洋二氏

プロジェクト参加校の 4 大学が集合し、まず初めに関西福祉科学大学の松宮先生から、オリエンテーションが行われた。

概要として、各大学の簡単な紹介や、関西福祉科学大学の学生が作成した、「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」のビデオを全員で鑑賞した。ビデオの内容は、プロジェクトの概要や目的、そして製作者の学生たちの想いを、被災地の画像と共に流していくものであった。現地でソーシャルワーカーが何を感じ、何を考え、被災者を支援してきたのか。その声を残したい、そして伝えたい。そういった想いがビデオから、強く伝わってきた。自分たちもこれからそのプロジェクトに参加するのだと考えると、光栄な気持ちがこみ上げると同時に、緊張感も高まった。

次に、同じく関西福祉科学大学の遠藤先生から話を伺った。

17 年前、ソーシャルワーカーとして阪神淡路大震災を経験し、「何もできない」という圧倒的な無力感を味わったことや、「我々にいったい何ができるのか」と葛藤したこと、そして、自転車で被災者の方々の元へ会話等、心のケアを行ったことなど。当時行った支援や、心に感じた想いを遠藤先生は私たちに伝えて下さった。

被災地の情報が流れている中、被災地のソーシャルワーカーの活躍が取り上げられることはない。ならば、ソーシャルワーカーは被災地で何もしていなかったのだろうか。そうではない、と先生は語る。「ソーシャルワーカーは、被災地でもその専門性と誇りを持って活動してきたと、私は考えている。それを伝えることが君たちの使命である」。先生はそう言ったあと、このプロジェクトの隠れた目的についても私たちに説明して下さった。

それは、様々な大学で、自分と同じソーシャルワーカーを志し、勉強している仲間達と仲良くし、人としての繋がりを見つけること。そして、このプロジェクトを盛り上げ、楽しめるものにすること。「お通夜ではないのだから、暗くならないこと。若者として、被災地にこれから復興していくためのパワーを与えてください」と、微笑みながら先生が言い、私は早くもこのプロジェクトに参加して良かったと感じた。人との繋がりを得ていきながら、ソーシャルワーカーについて学ぶことが出来る。学生として、このプロジェクトで出来ることは積極的に行っていくことを、心に決めた。

最後に、3 月に行われたパイロット事業に参加した関西福祉科学大学の柴田城宣さん、西畑知美さんからも話を聞いた。学生である今だから出来ること、学生にしか出来ないことは必ずあるということ、そして、現地のソーシャルワーカーが「話を聞いてくれて良かった」と言って下さったことを、私たちに伝えてくれた。学生である自分たちに何ができるのか、正直私は、具体的には理解できていなかった。ただ、ソーシャルワーカーの声を、伝えたいことを、学生として人々に届けることが使命なら、精一杯、自分に出来ることをしようと、そう考えた。

作成者（大学名・氏名）	中部学院大学　石川智也・古川友子
分類	座学
プログラム名	オリエンテーション・講義「岩手県社会福祉士会の取り組み」
日時・場所	2012 年 8 月 21 日　いこいの村岩手
講師・インタビュー対象者	岩手県社会福祉士会事務局長　佐々木裕彦氏

１．当該プロジェクトについてのオリエンテーション

関西福祉科学大学の遠藤洋二先生、松宮満先生より今回のプロジェクトについてのオリエンテーションが行われた。「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」「学生“語り部”プロジェクト」の概要、目的、その他の説明を受けた。「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」は被災地で援助に当たっているソーシャルワーカーの方にインタビューを行い、学生の感性でソーシャルワーカーの言葉を聞いて書き留めることが目的である。そしてそれを全国に伝えていくことが「学生“語り部”プロジェクト」の目的である。また当プロジェクにおける隠れた目的として、いろいろな大学で勉強をしている学生との仲間作り。真剣に受け止めることも重要であるが、楽しくやる・楽しく参加することが重要であるとの事であった。その後、今春に行われたプロジェクトで作られた DVD を見てイメージの確認を行った。

２．講義：「岩手県社会福祉士会の取り組み」

オリエンテーションの後に、岩手県社会福祉士会事務局長の佐々木裕彦氏より講義をして頂いた。内容は主に 4 つの資料を使用しながら、岩手県の社会福祉士会の活動についての説明を受けた。その中で話された内容を簡単にまとめたい。

- ＜挑戦の法則＞として、「挑戦の先には成功しかない。大きな挑戦の先には、大きな成功しかない。失敗とは何もしないこと、行動しないこと」と教えていただいた。ご自身が所属する社会福祉法人岩手和敬会ついての事業説明を行った。国からの指導で特別養護老人ホームに在宅サービスとして、ヘルパー・ショートステイ・デイサービスを取り入れることになったが、その中で在宅サービスを取り組むのに考えたのが、自宅で暮らしてもらうための攻撃の機能、家族に休んでもらうレスパイト機能、一時待避の機能、仲介機能、そしてこれらを調整する機能、これらをセットにして行うことである。岩手県和敬会の施設設備構想として、他の事業所と連携しながら医療ニーズの高い方は山岸和敬会に、生活モデルを実践する方は青山和敬荘に、そして地域のセーフティネット（自宅での支援）を活用するのに浅岸和敬荘にと、各ニーズへの対応を行っている。また地域セーフティネットに関して色々な所と連携を図りながら、利用者の欲求（ニーズ）にあわせてミクロ・メゾ・マクロと重層的支援を行うようにしている。
- 災害時において、入所施設に関しては 2006 年より内閣府の方からガイドラインが出ており、それに沿って支援の枠組みを作っている。避難所の協定が結ばれていないとの事でこれから考えていかなくてはならず、また施設間同士での連携を図り協定を結んでいくことが大切になってくる。3.11 の災害時、17 日の時点でガイドラインの図が岩手県内に回り、それに沿って対応することとなったため、スムーズに動くことが出来た。
- 社団法人岩手県社会福祉士会の説明。組織として、災害対策本部などが入ってきて、総務

委員会や地域活動委員会、地域包括委員会など様々ある。また地区ごとにブロック分けされている。沿岸ブロック（宮古・釜石）、気仙ブロック（大船渡・陸前高田）に大きな被害が出た。地域活動委員会に災害対策委員会を置き、成年後見などの活動を行い、最もメインになったのが地域包括の支援である。

- 災害管理とソーシャルワークに関して 2007 年のフィリピン会議より大きく取り上げらており、全国の取り組みがここからスタートした。
- 災害支援経過として、まず厚労省に支援申し入れをして、次に県の方に支援申し入れをした。この後、社会福祉協議会や各地域包括支援センターに申し入れをしていった。県から市町村宛の文章を出してもらい、被災地に展開していった。被災地にある地域包括支援センターには特徴があり、49 箇所ある内の半分以上が直営型の地域包括支援センターである。直営であるゆえに、震災時に避難所に避難した際に、地域包括支援センターの仕事がぜんぜん出来なかった。役場の仕事で精一杯であった。その際に、現地と結びつけるのが仕事であり、予算をどう繋げていくかを考えていくのが仕事であった。
- 支援を組み立てるときにまず考えたのが、ソーシャルワークとは概念だという事、概念を使ってどう現場に入っていくかが重要。専門職として学んできた事をどう生かすかを考えた時に、「専門機能を活用しワーカーシステム、クライエントシステムの関わりを基本にして、ターゲット（社会資源）を真ん中に入れて、最後は連携してそこに持ち込む」、これらを頭に入れながら、ジェネラリスト・ソーシャルワークの仕組みを作っていった。
- 県から「何もやってないのでは」と言われて、ターゲットシステムと言う仕組みを提案した。地域包括支援センターやボランティアセンターをターゲットに置くことで県外からきた専門者らとの連携をスムーズに行い、支援・行動しやすくするという目的がある。
- 専門職支援の統合が目指すものとして、ハード面においては、○ミクロ・メゾ・マクロの支援の循環の確保、○異分野との協働○各専門性の効果的な支援と客観性の確保、○アセスメントの統合、○専門支援・チーム支援・民間支援の判断確保、○行政や民間への提言と予算確保、○行政と民間の縦軸連携確保、現地専門職間の横軸連携確保、があげられる。ソフト面においては、○被災地の望まない支援の回避、○信頼関係による動機付け支援と小さな自己決定の蓄積で自立支援、○具体策だけが支援ではなくモニタリングも支援そのもの、と 3 つがあげられている。
- 災害支援ターゲットシステムからの学びとして地域包括支援センターからは、○する側される側の経験、○事業委託の経験、○専門職同士の動機付けで心を開く意味、○無理な詰め込み、○非専門職に支援を受ける意味、○センターの「専門性」への理解不足、○ソーシャルワーク支援と違う違和感（面接や資源活用）、○連携効果不十分、があげられる。社会福祉協議会の支援からの学びとして、○事業委託の性質、○事務と委託の違い、○広すぎる視点、○医療系とのパイプの限界、○連携効果不十分、があげられる。
- 災害時のステージ支援の必要性。ミクロ（医療）、メゾ（介護）、マクロ（生活）と広がりを絶やすことなく連携して支援していくことがひとつの課題。そのためにも医療チームでなく福祉チームを提案する。実際の医療と福祉との連携不足の経験より、ミクロの時に医療、介護、福祉を同時にやらなければならないことを整理しておく必要がある。「連携」「協働」災害ステージごとのチームケアの必要性。

講義を受けての遠藤先生からの言葉

・　インタビューのポイントとして伝えたいこと。

　インタビューをする際に「何も支援ができなかった」と言われると思う。普段使える社会資源がないから震災時にソーシャルワーカーは何もできない！？間違いではないと思うが、震災直後からできたことはたくさんあったと思う。インタビューの中で、ソーシャルワーカーとしての専門性、知識や技術を使って支援していた事実や出来事を掴んで頂くことに意味があると思う。いろいろ聞いてきた中で、「ワーカーさんはこういうことが出来たんですよね」というように伝えていくことができれば、現地でがんばるワーカーさんの大きな助けになるかもしれないと思う。レスキューなどはハードに人の命を救う。ソーシャルワーカーはソフトに静かに人々の命を守ると考えている。エッセンスなど何かを、皆さんの感性で受け取ってきて欲しいと思う。

作成者（大学名・氏名）	日本社会事業大学　飯田祐貴
分類	講義
プログラム名	岩手県社会福祉士会の取り組み
日時・場所	2012 年 8 月 21 日　いこいの村岩手
講師・インタビュー対象者	岩手県社会福祉士会事務局長　佐々木裕彦氏

今回、「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」ということで、日本社会事業大学を含む 4 つの福祉系学科を持つ大学が合同でソーシャルワーカーにインタビューするにあたって、初日に宿泊場所である「いこいの村岩手」で岩手県社会福祉士会事務局長、佐々木裕彦さんに講義をしていただいた。

スライドを見ながらの講義であり、最初に山田町や大槌町などの津波の被害の写真を数枚見た。それはテレビでも見ていたものもあったが、当時の気持ちを思い出すものとなった。「ひょっこりひょうたん島」のモデルになった島が、津波によって灯台など流されて、今後新しく灯台を建てようとしているという話は印象に残った。

次に、佐々木さんが現在、理事や施設長を務めていらっしゃる社会福祉法人岩手和敬会の歴史や事業内容、支援の構想などについて話があった。複数ある和敬荘でそれぞれ医療に力を入れたり、在宅でのサービスを行っていたりしていて、それぞれの施設を連携させて幅を広げ、地域での支援にもつなげていこうという構想は地域福祉において重要だと感じた。和敬会やその他施設間、市町村間で災害発生時の避難、協力について協定を結んでいたこともあって、震災当時にはスムーズに介護が必要な高齢者への対応ができたとの話もあった。

その次には、岩手県社会福祉士会の話へとなっていき、同じく社会福祉士会の歴史や組織形態、ソーシャルワークの概念などの説明を聞いた。スライドには様々な支援の仕組みが書かれていて今後再度学ぶことになると感じた。災害とソーシャルワークのあり方についての部分では体験を踏まえ、課題にも言及されていた。震災直後は目の前の命のことで精いっぱいで、専門職が専門職としての仕事ができなかったという問題もあり、県外から来たソーシャルワーカーが事務仕事を代わり、現地のソーシャルワーカーが地域をまわれるようシステムを作ったということであった。だが、現地のワーカーでは同僚や家族を亡くされ、「自分がやらなければ」という強い思いから寝ずに仕事を続けていた人もいて、どうにか説得して休ませたという話もあり、ソーシャルワーカーの難しさに気付かされるものであった。医療面との連携については、アセスメント表の共有がうまくいかないなど福祉と医療の協力に対して障害になることも多かったという。災害発生時の DMAT（災害派遣医療チーム）としての支援は重要であるが、避難所などでの生活のコーディネートを行う DWAT（災害派遣福祉チーム）の重要性を述べられていて、これからのハード面以外の支援システムの構築やワーカーがこれからしていくべきことにつながっていると感じた。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　安川紗代
分類	講義
プログラム名	岩手県社会福祉士会の取り組み
日時・場所	2012 年 8 月 21 日　いこいの村岩手
講師・インタビュー対象者	岩手県社会福祉士会事務局長　佐々木裕彦氏

岩手県社会福祉士会事務局長の佐々木裕彦さんから、「岩手県社会福祉士会の取り組み」を聞かせていただいた。

私がとても印象に残っているのは、佐々木さんが言っていた「本当に困っている人は“助けて”と言えない。よって、そういう人に“助けて”と言われる人になりなさい。」という言葉である。今回の震災で、被災地のソーシャルワーカーは「自分たちでどうにかしなくてはいけない」という思いが強く、周りからの「応援するよ」という言葉を断る人達が多かったという。そういう人達に断らせないことがとても大切であるということが講義を通して理解することができた。

岩手県では社会福祉士会が震災後に連携のサポート体制を作っていて、現地のソーシャルワーカーが安心して地域を回れるような仕組み作りをしていたという。ソーシャルワーカーが直接的な支援を行うことができたのは、このような仕組みがあったからだと思う。ミクロな支援からマクロの支援まで幅広くあるが、マクロの支援があるからこそ、ミクロの支援ができるのだということもわかった。なので、インタビューの際に、直接的な支援だけでなく、間接的な支援のほうにも目を向けて行っていきたいと強く思った。

また、昔からの言い伝えを、今回の震災で生かすことができなかったという。例えば、昔の人が作った堤防は海に対してカーブして作られているが、新しく作られた堤防は海に対してまっすぐに作られている。今回の津波で、昔の堤防はしっかりと残っていたのに対して、新しく作られた堤防は簡単に壊されてしまったという。また、山の中腹にある石に「これより下に家を建てるな」ということが書いてあるのだが、下の町にたくさん家を建ててしまっていた。

昔の人がさまざまな経験を生かして考え、作ってきたものが、現代に引き継がれていない。同じ悲劇が繰り返されないように、私たちが伝えていくことが求められているのだと思った。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　小野田優香
分類	視察
プログラム名	被災地視察
日時・場所	2012 年 8 月 22 日　岩手県陸前高田市
講師・インタビュー対象者	

8 時過ぎ、教員の運転する車に乗り、私たち淑徳大学生 4 人は陸前高田市へと向かった。最初のうちは車から見える景色があまりに日常的で、被災地に来ているということを忘れてしまいそうだった。どんどん車を走らせ陸前高田に近づいてくると、ちらほらと仮設住宅が見えるようになってきて被災地に来たのだという思いが出てきたころ、住宅は見えなくなり代わりにテレビでしか見たことのなかった被災地の光景が現れた。道路は津波後に舗装されたようで車も普通に走っていたが、視線を横にずらすと建物などはほとんどなく、あるのは“がれきの山”だった。

そこで一度車を止め、自分たちの足で歩いてみることとなったが、テレビで見た時の衝撃と実際に自分の目で見た時の衝撃の違いに驚いた。正直ここまで違うとは思っていなかったし、被災地の状態を目の当たりにして言葉が出なかった。舗装された道路にあるガードレールから下をのぞくと、ドライヤーや片方だけの靴、食器、くし、ぬいぐるみなど生活していた証が残っていた。“がれきの山”といわれるものも津波が来るまでここに建っていた家屋などからできており、そこには様々な人の暮らしや思い、生活、記憶、歴史があると思うと私たちがそれらを“がれき”と呼んではいけない気がした。

この地点から歩いていける距離に“奇跡の一本松”があるということで、私たちは歩いてそこへ向かった。そこへ向かう途中でも建物が崩れていたり、看板が曲がっていたりと津波の爪痕がはっきりと残っていた。実際に一本松の近くまで行ってみると松の木の前には一つの建物が建っていたが、あとは津波で流されたのかほとんど何もないような状態だった。この建物が松の木に直接津波が押し寄せるのを防ぐ防波堤のような役割を果たしたことによって、この松の木だけはただ一本残ることができたのだと思った。この近くには川が流れていたが、この日はすごく穏やかな流れだったためここから建物などを飲み込む津波を想像することはできなかった。

その後、一本松をあとにして被害の大きかった市の中心部へと車を走らせた。車にはカーナビが付いておりさまざまな建物が表示されていたが、窓の外の景色にそれらしきものは見当たらず、ここが市の中心部で栄えていたということは全く想像つかなかった。目印はないが、カーナビを頼りに市役所へ向かいそこの駐車場に車を止め、歩いて回ることとなった。

道路などのがれきはほとんど撤去されており、想像していたよりも片付いているという印象を受けた。しかし、建物の中を見てみると、物は散乱し車も中に転がったままになっていて、とても震災から 1 年半近く経っているとは思えなかった。市役所の入口には献花台が設けられていたので、そこで皆で手を合せ、亡くなった方々のご冥福を祈った。

市役所の前ではこの地域に住んでいたと思われる方がスタッフとなり、以前の町の様子などを写真を見せながら話していた。その写真を見ていても、今の景色からそれを想像するのは難しかった。周りを見渡してみても、目に入るのは草が生え草原のようになった街並みで、震災

以前の街並みを知らない私たちにとってはそこに多くの建物が建っていたとは思えなかった。人々が作り出した建物などは簡単に流され1年半経っても昔を想像できるようにはならないのに対し、自然は津波の被害にあっても1年半で草原のようになるまで生い茂っているのを見て、自然の力の恐ろしさと同時に力強さを感じた。人間は文明を作り新しいものを開発していくことによって生活を豊かにしてきたが、その代りに自然の偉大さや恐ろしさというものを忘れていった。そして、実際には自然に生かされているにもかかわらず、自分たちが自然を支配しているという勘違いをしてしまっていた。今回の震災によって私たち人間は自然に生かされているということを改めて思い知らされたような気がする。自然はいつ何が起きるかわからないため、普段からなにかあった時の準備をしておくことが大事だということを感じた。

同じ被災地でも場所によって被害の大きさは全く異なる。今回の場合、沿岸部は津波によって大きな被害を受けたが、内陸部はあまり被害がなくここまで大きな被害があったということすら知らないという人もいる。だから一口に被災地といっても被害の大きさが違えばニーズも違う。その違いを知った上でそれぞれに合った支援をしていく必要があるのだと感じた。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　古根川和貴
分類	視察
プログラム名	被災地視察
日時・場所	2012 年 8 月 22 日　岩手県陸前高田市
講師・インタビュー対象者	

私たち関西福祉科学大学の学生 3 名と淑徳大学の学生 3 名は、教員の運転する車で岩手県陸前高田市へ到着した。町並みは津波によって一掃されていた。ゆっくり車を走らせ、辺りを見渡しながら進んでいると山のように積まれたがれきが見えてきた。1 年半も経過しているのに、がれきを撤去できてないという現実がとても苦しかった。車を止め外に出てみると、がれきの撤去作業をするユンボの音しか聞こえず、これが現実なのかと不思議な感覚に襲われた。普段生活する中で何かしらの音を感じているため、生き物の音、人の声、木々のさえずり、車の音のない世界は別世界にいるような感覚だった。また足元の雑草をよく見みると、そこにはドライヤーが転がっていた。車の走る道路のわき道まで実際に津波がきていたことを、そこから知ることができた。

次に我々は、住宅街に足を向けた。言われなければ家々があったと分からないくらい雑草が生い茂っており家の基礎だけが残っていて、本当にまたここに町ができるのかと感じた。きっとたくさんの時間と労力が必要なんだと感じ、人の無力さを感じた。津波に負けずかろうじて

残った建物がいくつかあり、近づいてよく見てみると、水たまりに油のようなものが浮いており誰も手つかずといったような無残な姿だった。少し海辺に沿って歩いて行くと人だかりができていた。そこには、テレビでも取り上げられた「奇跡の一本松」があった。一本だけであるが力強くそびえたつ松の姿は、復興を勇気づける存在のように感じた。何万本もあった松林のうち、なぜ一本だけ津波の影響を受けずに残ったかと言うと、津波の来る方向に建物が建っていてそれが遮蔽物となっていて一本の木だけが倒れずに残ったそうだ。一本松は塩の浸食により根腐れを起こしているそうで、今後切り取られ、モニュメントとして再び同じ場所に戻されるそうである。命のある時に一本松をこの目でみることができて、とてもよかったと思う。

奇跡の一本松を後にし、我々は陸前高田市の市役所に足を運んだ。そこでは、我々以外の一般の人たちもいて実際に陸前高田市に住んでいた人が語り部をしていた。一緒になって話を聞いてみると震災前の町の写真を見せてもらえた。私はその時、息を呑み込んだ。何というか、目の前の風景が写真と同じ場所であることははっきりとわかるが、写真のきれいな町並みがなぜこのような風景に変わってしまうのか理解できなかった。私たちは、現地に行く前に先輩たちから「現地に行かないと分からないことがたくさんある」と言われていた。先輩たちの伝えたかったことは、この感覚だったのかと感じた。市役所は、撤去作業をあえて全く行っておら

ずそのままの形で残っていた。中には車から生活用品まで様々なものが転がっていた。上の方を見ると服や傘が3階部分までひっかかっていて津波の高さの恐怖を感じた。また建物の周辺にも、雑草の中に茶碗や箸、服、靴といったそこに暮らしがあったとすぐに感じとれるモノばかりで、言葉にできない感覚に襲われた。

さらに辺りを見渡すと先に赤いリボンが付けられた木の棒が無数にたてられていたことに気づいた。後から聞いた話であるが、それはそこで死者が発見された所を示しているそうである。周りを見るだけでも数えきれない数が立てられており、これだけの人が逃げ切れなかったのかと考えるととても苦しい思いだった。

そして我々は市役所を後にして車を走らせた。少し丘の上の津波の影響を受けていないところに来ると世界が変わったように、木々や町並みが並んでおり、そのギャップに驚いた。その辺りにはたくさんの仮設住宅が建てられており、被害のあった場所の近くで仮設住宅に住む苦しさはきっとその人にしか分からないものだと感じた。

たった一日だけの視察だったが、この視察を通して、私たちは現地の状況を肌で感じることができた。そしてその状況は、私たちの想像をはるかに上回るものだった。しかしこの現実を受け止め、この経験を今後のプロジェクトの活動に活かしていきたいと感じた。

作成者（大学名・氏名）	日本社会事業大学　野澤千明
分類	視察
プログラム名	被災地視察
日時・場所	2012 年 8 月 22 日　岩手県陸前高田市～釜石市
講師・インタビュー対象者	

私はこれまで宮城県気仙沼市で 3 回、岩手県大槌町で 1 回のボランティアを経験していた。特に昨年、大槌町での活動の際には釜石市内を通っていた。今回の被災地視察では、釜石市と陸前高田市を回ったが、昨年も訪れた場所であったことと、今回参加していただいた谷澤さんが元釜石市市役所の職員であったことがあり、釜石市の視察は非常に印象に残る経験であった。

今回被災地を視察して、東日本大震災がもたらした被害の大きさを実感した。これまでも被災地を訪問して見ていたので、わかっているつもりだったが、それは本当に“つもり”だったのだと感じた。私は震災以前に東北を訪れたことはなかったので、震災前の様子、景色を知らない。津波の被害を受けて、基礎だけになってしまった住居跡を見て、そこから以前の様子を想像するだけであった。しかし今回の被災地訪問では、以前の様子を知る方の案内があり、また写真も見せていただいたので震災前の様子に触れることが出来た。

谷澤さんの話を聞き、写真を見て、生活の様子を知った時に「ああ、ここに生活があったんだ」と思った自分がいて、やはり“わかっていなかったのだ”と感じた。と同時に、経験していない自分には“わからないこと”なのかもしれないとも思った。被災した方々の気持ちを知り、広めていきたいと思ったとしても、伝える自分は震災を経験していない。そんな自分が伝えることに意味があるのかとも考えられた。しかし、谷澤さんは、釜石市内のいろいろなところを案内してくださり、話をしてくださった。そしてその中には、谷澤さんが生活していた谷澤さんの家もあった。車で通りすぎただけであったのだから、そこが自分の家であったと言わないこともできたはずなのに、私たちに伝えてくださった。その時に谷澤さんがどんな気持ちだったのかはわからない。もし、その時の気持ちを説明されたとしても、きっと理解できないのだろう。それでも私たちに伝えてくれた、話そうと思ってくれたということは、私たちに知ってほしい、感じてほしいと思ってくれたからなのではないかと思っている。谷澤さんのように、伝えようと思ってくれる方がいる限り、私はその方の話を聞き、それを発信していかなくてはならないと考えるようになった。

釜石市の視察の間に、ある旅館のおかみさんと話すことが出来た。その方は、私たちが来たことに対して歓迎してくれ、「これからは福祉の人の力が必要になるから、しっかり勉強して、戻ってきてね」と言ってくださった。これから私たちがどのような将来を選択するかわからない。けれども、そう言ってくださった。おかみさんは笑顔で話していたが、それはとても重い言葉であり、これこそが私たちが被災地を訪問して学ぶ理由なのかもしれないと思った。実際

に自分の目で見、被災した方々の話を直接聞かなければわからないことがある、それを実感させられる視察となった。中には、被災していない私には“わからないこと”“理解できないこと”がある。それでも、わからないならわからないなりに被災者の言葉、自分の感じたことを伝えていく必要があると感じたし、私にはその役割があると思った。私が今後、被災地に行き被災者の支援を行うことがあるかないか、今はわからない。けれども、谷澤さんやおかみさん、その他伝えてくれた多くの方々の言葉を胸に、これからも震災を絶対に忘れないと考える視察となった。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　桝田綾子
分類	視察
プログラム名	被災地視察
日時・場所	2012 年 8 月 22 日　岩手県釜石市
講師・インタビュー対象者	

このプロジェクトは、大規模災害時、ソーシャルワーカーが「何ができるのか」、「何をすべきなのか」などを、実際に災害支援活動に従事したソーシャルワーカーから学生が聴き取り、ソーシャルワーカーの“想い”も含めて記録として残すことを主な目的としている。4 泊 5 日の期間内で被災地の現状を理解すると共に、現地で活動するソーシャルワーカーにインタビューを行う。その後、ソーシャルワーカーの“声”プロジェクトで聴き取った内容を整理し、講演や出版物などを通じて、ソーシャルワーカーの“声”を発信するのだという。

8 月 22 日の午前中から、淑徳大学チームは陸前高田や釜石、大船渡などの被災地を訪問した。レンタカーで移動していたのだが、カーナビには店舗名や建造物の名前などが表示されているのに、現場には何もない。そして被災地を目にした途端、言葉が出なくなった。新聞や報道などでは「被災地の状況を目前にすると言葉が出ない」というフレーズを何度も見聞きはしたが、被災地に訪問する以前は、その言葉自体が遠く感じられていた。しかし、実際に被災地を自分の目で見て、耳で聴くと、「言葉が出ない」ということを実感する。震災当時は、怪我人や行方不明者をどこから探してよいのか分からず、立ちすくむ消防隊員の姿もあったという。そのことも含め、被災地に行かなければ分からないことは多くあった。例えば、場所によっては被災の状況が全く違うということも、その一つだ。ある場所では大きな建造物の真後ろは被害が少ないところもあったが、また別の場所では大きな建造物もその真後ろの家なども全て津波で流されていた場所もあった。建物の土台だけが残っていたり、半壊状態の建物も数えきれないほど残されていた。震災が起こってから一年半以上が経っても、元通りになるどころか、未だ片付いていないものが多くある。一年半が経って漸く、ここからが正念場なのだと思った。

宿泊している八幡平の宿から町へと降り、車から降りて最初に見渡すことができたのは、辺り一面に広がる草原と、津波で破壊されてしまった家の木片や生活用品、大量の砂などが数十台のショベルカーによって至る所に集められているところだった。現在は草原であるその場所も、震災が起こる以前は住宅街だったらしいが、震災以前にその場所に訪れたことがない私達にとっては、まるで最初から、そこが草原だったのではないかと思わせてしまうくらいの光景が目前に広がっていた。言い換えれば、今、自分達が立っている場所に津波が襲ってきたのだという実感がなかった。ふと、ガードレールの真下を見ると、恐らく津波の塩分で変色したのだろうドライヤーがポツンと落ちている。残された生活用品が、確かにその場所が町であったことを私達に生々しく感じ

させた。私は、すぐさまに、ドライヤーに焦点をあててカメラのシャッターを切った。写真に収めなければと思ったのだ。その時、私の心中は、それまで以上に「多くの人間に被災地のことを伝えなければいけない」という気持ちで溢れていた。
被災地を訪問するにつれて、私はショックを隠せずにいた。何のショックだと問われると上手く答えられないが、分かるのは、自分が見ている現実から目を反らしたくなったのだということ。被災された方々には本当に申し訳ないが、目前に広がる光景が嘘だと思いたかった。そんな自分がとても恥ずかしく、また、情けなかった。けれど、そこで目を背けては何も伝えられない。自分達の視点で見聞きしたものを多くの人間に伝えることができなくなる。それだけは嫌だった。この気持ちを忘れずに、被災地のことや被災された方々への思い、現地のソーシャルワーカーが専門性と誇りをもって被災地で活動してきたことなどを多くの人間に伝えたい。このとき既に、私の思いは「伝えなければいけない」から「伝えたい」へと変化していた。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　古根川和貴
分類	その他
プログラム名	グループ討議
日時・場所	2012 年 8 月 22 日　いこいの村岩手
講師・インタビュー対象者	

プロジェクト 2 日目に、私たちは現地視察を行った。そして視察を終えた後、私たちは感想を述べるミーティングを行った。被災地へ実際に足を踏み入れての感じ方は、人それぞれ違うけれども、生で見る被災地は想像をはるかに超えていたようだった。誰もが胸の詰まる想いの中、懸命に自分なりの言葉を探していたように感じた。

ある学生は、震災から 1 年たった雑草ばかりの被災地をみて、本当にここに人が住んでいたのか疑うような気持ちになったと語った。しかしよくみてみると、人が住んでいた跡形が至る所に残っていて、津波のすさまじさを感じたようだった。またテレビでよく耳にした「跡形もない」というのは嘘だと指摘し、被災地一つひとつに人々が生きていた跡があると訴える学生もいた。

ある学生は、津波の生々しさを感じる中で目を背けたくなる気持ちになって、自分が逃げているような気がして情けなかったと語っていた。さらに彼は、目の前の現実と向き合っている被災地の人々と比べ、自分の弱さを痛感したと語った。この他にも、視察の際に現地の人と話す機会があり、「頑張ってね」と励まされ、これから私たちが被災した人々を支えていくのに、逆に励まされたことがとても不思議な感じだったと語った学生もいた。

学生たちの中には、これまでに宮城県や岩手県にボランティア活動で来ていたものもいた。その学生からは、今でも被災地を訪れるとやりきれない思いになるといった苦しい胸の内が語られた。被災した現地を見ることは、誰もが苦しいことで、そうした中でも真剣に向き合いながらどうすれば被災者のため、地域のため、社会のためになるのかを考えることが一つの支援なのではないかと思う。被災地視察を終えてそれぞれの感想を発表することで、自分たちの気持ちを整理することができ、自分とは違う物の見方・感じ方・考え方を知ることができた。これらは、これから行うインタビューに必ず役立つものになると感じた。

作成者（大学名・氏名）	中部学院大学　石川智也・古川友子
分類	その他
プログラム名	グループ討議
日時・場所	2012 年 8 月 22 日　いこいの村岩手
講師・インタビュー対象者	

大学ごとに分かれて、岩手県内の被災地視察を行ったその夜に学生・教員らが集まり、被災地視察をして感じたことを、それぞれの感想として報告し合い、共有した。

＜関西福祉科学大学＞

- 自分の中で整理つけるのに時間がかかった。わかりやすい言葉で感じたことを伝えていけたらと思った。
- きれいに片付いていて実感があまりわかなかった。地元の方が対応されているのを見たり、写真を見たりして被害の大きさなどを実感した。すごく近くに感じた。
- 写真でしか見たことがなく、イメージがあまりわかなかった。先輩たちが言っていた「被災地は行ってみないとわからん」という言葉の意味がわかった。
- 宮城県に行ったときは津波被害の家の土台が見えていたが、陸前高田は草が生えていて何があったのかわかりにくかった。被災地でも違いがある。瓦礫があってよく見たら家の残骸であり、胸が詰まる思いであった。

＜中部学院大学＞

- 植物が生えていて人が住んでいたのかわかりにくかったが、よく見ると基礎部分が残っており、多くの家があった事実を知る。津波などの力の凄さや怖さを印象付けられた。
- テレビなどで見たものがあった。駅など津波で壊されてしまっており、震災の凄さというものを感じた。
- 大槌で、ここに何があったのか想像つかなかったが歩いてみると何も残っていない駅などが見つかり、怖いという印象を受けた。
- いろんな建物が建っていたんだろうなと思いながら見ていたが何も無く、普段では生えないような植物が生えていて住める状態で無くなってしまったのだと思った。仮設でできたお店などもあり、働いている方などもいたが、仮設での暮らしは大変なんだろうなと思った。

＜淑徳大学＞

- テレビで見るのと実際に見るのではこんなにも違うのだなと思った。生活用品をみて生々しさを感じた。赤い×印をみて目を背けたくなったが、震災から目を背けてはいけないと思った。
- 跡形もないと耳にしてきたが、違うなと思った。まだ痕跡が残っていて否定するように思えた。こうやって生きていられるのが幸せに思った。実際の現場の状況や自分の気持ちを今後も伝えていきたいと思った。

- 言葉が出なく、そこにあった生活が想像できなかった。想像できないくらい流されていて自然の強さを感じ、そこから草が生えているのを見て別の強さも感じた。同じ被災地での被害の違いに衝撃を受けた。感じたことを伝えていかなければと思った。
- カーナビにあるものが何も無くて市街地を走っていてもわからなく、何もなくなってしまったのかと思った。津波による被害の地域の差を感じた。

＜日本社会事業大学＞

- 釜石での防災センターで話を聞いて、つらい気持ちになった。沿岸部分で前の写真と比べてみて、地形が変わるほどの力を感じた。捜索終了の文字をみて、遺族に対してやるせない気持ちを感じた。
- 以前、ボランティアに行ったところとは違うと感じた。情けない気持ちにもなったが、自分がどう行動していけばいいか考えていけたらいいなと思った。
- 昨年の夏に釜石に来たときと比べて、１年経った今でも同じ状況にあるのをみて、復興に向けて進んではいるが、まだまだ時間がかかるなと感じた。場所によって進み具合が違うのだと感じた。亡くなった方のことを思ったとき、今までに無い悲しさを感じた。
- 釜石で仮設住宅をみて、震災が続いているのを感じた。「私たちもがんばっているから、がんばって」と応援され、自分たちが応援する立場だと思うが、今までに無い体験で一番印象に残った。

所感

学生同士でお互いに感じたことを共有し合い、同じ世代の方がどのように感じているのかを知ることができた良い機会であった。同じ被災地を訪れた学生でも自分とはまた別の角度から考え、感じていた。自分が訪れなかった被災地へ行った学生からも、自分では感じられなかった思いというものを聞けた。幅広い観点からの感想を聞いて、震災・被災地についての思いをそれぞれで深めることができた。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　桝田綾子
分類	その他
プログラム名	グループ討議・インタビュー方法の確認
日時・場所	2012 年 8 月 22 日　いこいの村岩手
講師・インタビュー対象者	

ミーティングでは、初日のオリエンテーションや講義などを踏まえながら 2 日間を振り返った。学生同士で被災地訪問の感想を伝え合うだけでなく、各参加校の先生方からの貴重なお話を聴くこともでき、震災時の津波の VTR なども見ることができた。

津波の映像を見たのは、もちろん初めてではなかった。震災時や震災直後の映像も、津波が襲来するまでや襲来してきたときの映像も、これまでのニュースで何度だって見てきた。けれども、ミーティングで見た津波襲来の映像は、それまでに見てきた映像とは全くの別物に見えた。何故、それまでに見てきた映像と全くの別物に見えたのか、最初は理由が分からなかった。淑徳大学の代表の一人としてプロジェクトに参加したからなのか。多くの人間に伝えるべきことを伝えなければいけないという責任感からなのか。被災地を訪問してきた後だからなのか。どの理由も間違いではなかったが、正解でもなかった。本当の理由は、自然の豊かさと脅威を感じたからだ。

自然は人類に様々な豊かさをもたらしているが、人類は様々なテクノロジーを用いて、自分達の都合で、自分達の欲望の赴くままに自然に手を加えてきた。だからこそ、人間の影響が全くない自然環境は急速に減少しつつある。いろいろな考えが頭の中を廻り、自然の脅威を思い知らされた。自分の、人間の汚い部分をまざまざと見せつけられたような気がしたことも否めない。ふと、旧約聖書の『ノアの方舟』を思い出す。『もしも私達が神話の中の存在だったとしたら、全人類が滅んでいたのだろうか』とまで想像してしまうほど、津波の映像は恐ろしかった。

その後は各大学での行動。会議室でミーティングをするも良し、宿泊部屋でミーティングをするも良しだったので、淑徳大学チームは宿泊部屋でミーティングを行い、他大学は会議室でミーティングを引き続き行った。

まずは、翌日から行うインタビューの流れを再確認した。事前学習で検討した質問の項目を再度見直し、どのような質問をするのかということや、質問の項目を決めたり、インタビュイーが答えやすい質問の仕方、どこまで聞いてよいものかということなども話し合い、2 日目は終了した。

質問の中には、インタビュイーが答えて下さるか分からない質問などもあったが、学生ならではのインタビューにするため、聞くだけ聞いてみようということで一致し、最終確認後、解散となった。被災地訪問や精神的ショック、車での移動なども含め、疲労していたにもかかわらず、ミーティングは夜遅くまで続いた。そして次の日、初めてのインタビューに臨むことになった。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　辻佑佳里
分類	インタビュー
プログラム名	障がい者支援施設　吉浜荘
日時・場所	2012 年 8 月 23 日　岩手県大船渡市三陸町
講師・インタビュー対象者	業務支援課長　千葉三佳氏

関西福祉科学大学二次派遣チームは、大船渡市にある障がい者支援施設「吉浜荘」の職員である千葉三佳氏にインタビューを行なった。吉浜荘は山の頂上近くにあり、重度の身体障害を持つ人が入所している施設である。

震災当時、千葉氏は大きな揺れの後、何が起こったのかすぐには分からず戸惑ったそうである。そしてその後すぐに利用者の安全が頭を過ぎり、車イスを押して、また寝たきりの利用者はベッドごと避難をさせたそうである。いつもは防災訓練を嫌がる利用者も、この時は誰もが何も言わず従ってくれたと千葉氏はおっしゃっていた。日頃から防災訓練を行っており、施設において人的被害はなかったそうである。施設では防災用の照明も整備しており、さらに年度末にたまたま買い替えで揃えた非常食があったおかげで、食料確保には大きな苦労は要しなかったそうである。

しかし困ったことは情報を得ることだった。利用者家族の安否確認や自宅の状態を利用者に伝え、安心してもらいたかったが、どこに行けば必要な情報が手に入るのかが分からなかったそうである。そのため情報はなかなか得られないまま、そして携帯電話も繋がらないという状態で過ごした。数日が経ち、やっと携帯電話が通じ、安否情報が徐々に得られるようになりだした頃、吉浜荘では少し落ち着きを取り戻した日常が始まりだしていた。しかし山を下り、少し街に出てみるとまだまだ悲惨な状態が広がっていた。

千葉氏は、震災が起きたことで連携の大切さを痛感したとおっしゃられていた。もともと吉浜荘では、職員同士の連携は割合よかったが、入所サービスのみの施設ということもあり他機関との繋がりがあまり無かった。そのため他施設への支援、情報交換にまですぐには考えが及ばなかったそうである。そして千葉氏は、その下地を今から作って行きたいと力強くおっしゃっていた。その言葉にはこれからの希望が込められていた。確かに震災が起きて失ったことは沢山あるのだろうが、得たものもあるんだという未来への前向きな姿勢が感じられた。

最後にソーシャルワーカーを目指す私達に何か一言頂けないかと伺った。

千葉さんは「日頃ソーシャルワーカーという意識で仕事しているわけではないので、それに

は答えられないが、施設での私の立場は、雑用係と思っている」と答えて下さった。そうおっしゃったその言葉に何かとても大きく熱いものが込み上げてきた。誰もしない、出来ない仕事を引き受けるという縁の下の力持ちのような存在が、ソーシャルワーカーなのだと私は感じた。そしてその裏方としての存在こそがこれからの復興に必要な力だと感じた。

このインタビューを通じて私は、ソーシャルワーカーになりたいと改めて感じた。はじめこのプロジェクトに参加がさせていただく中で、「このプロジェクトに意味はあるのだろうか？」「私に出来ることはあるのだろうか？」と沢山の葛藤があった。千葉氏へのインタビューを行って、その答えが分かったような気がした。けっして目立つことのない裏方のような役割を担うソーシャルワーカーの活躍や働きをみんなに伝えていくこと、きっとそれが今の私達に出来る支援の形だと感じた。

作成者（大学名・氏名）	日本社会事業大学　佐藤茉奈
分類	インタビュー
プログラム名	就労継続支援 B 型事業所　青松館
日時・場所	2012 年 8 月 23 日　岩手県陸前高田市米崎町
講師・インタビュー対象者	サービス管理者　菅野好子氏

今回インタビューに協力してくださった菅野さんはソーシャルワークの仕事に携わって 13 年のキャリアを持っており、震災当時勤めていた青松館には 4 年前より勤務していた。青松館での業務内容は利用者の個別支援計画や施設の経営運営業務などを行うサービス管理責任者であった。

震災が起きた 3 月 11 日、青松館はいつも通り作業が行われており、震災が発生した 14 時 46 分､利用者は普段 15 時 45 分に行われる終礼が少し早まってその時たまたま集合していたため､6 名の職員に対し 35 名の利用者がいたが机の下に隠れる誘導や外への避難などはスムーズに行えた。建物が倒壊する恐れがあったため全員が外へ避難し、その時菅野さんを含め職員方は施設長の指示を待つと共に利用者の不安の軽減、身体への負担を減らすことに努めていた。そのおかげかパニック状態に陥る利用者はおらず、職員と一緒に煙のように家々を飲み込みながら迫る津波を遠くに見ていた。その後津波警報が出ていたため全員で小高い場所に移動したがその 2～3 メートル下のところまで海水が迫り、車に海水が浸透してしまったため利用者が体を休めることができる施設へ避難することになった。避難先に設定されたのが青松館から少し離れた場所にある介護老人保健施設の松原苑であった。職員の誘導や補助により震災発生から約 2 時間後には全員が松原苑にたどりつくことができた。だが建物は半壊しており、松原苑の利用者に加え市民などたくさんの避難者が詰め掛けて泊まれる状態ではなかったため、そこには職員が青松館へ物資を取りに戻る間だけの滞在となり、その日の夜を過ごしたのは再び移動した後の知的障害者入所更生施設のひかみの園であった。

翌日 3 月 12 日の朝に青松館の分場である青松館せせらぎの状況確認がされ、それらの施設を運営する社会福祉法人大洋会の本部が置かれる大船渡市へ一緒に移動した。

大船渡市に本部を構える社会福祉法人大洋会は今回インタビューをした青松館の他に 8 つの施設を持つ大きな法人であったため相談支援員の数が充実していており、また栄養士がいたおかげで食事について困ることもなかったため、それらが震災当時活動する際に大きな強みになった。

13 日以降の活動は主に大船渡市に避難した利用者を家族の元へ戻る手続きをすることであり、ほとんどの方は戻られたが家が被災した家庭で障害の面で避難所への入所が難しい方は福祉避難所で過ごされ、利用者の方全員が避難所から出ることになったのは 7 月頃であった。

在宅において行われた活動は利用者の家庭を一軒一軒回り、新聞を持って行ったりして情報提供を積極的に行い、情報不足による不安を解消することであった。また、今までの習慣が一変し不安を抱える利用者が再び生活の幅を取り戻していけるように、被災した青松館をハード面や経済的な支援において立て直していこうとする活動が行われた。そこで活躍したのは大洋会に所属する方だけではなく、青森や福井などのさまざまな法人が手を貸して下さり、とても助かった。まれに何をお願いすれば良いのか分からないという問題はあったが、ミスマッチな

ボランティアについての問題はたくさんの事例の中のある一面であり価値観の違いによって生まれるものであると思う。また、専門職への心のケアについては職員の間での勉強会や精神保健福祉士による相談は行われたが、その件数はさほど多くはなかった。それよりも共に働く職員みんなで励まし合ったり、ねぎらうことで気持ちが楽になった。

震災を経験しての反省点としては、今回はたまたま好条件が揃ってその場にいた利用者・職員全員無事でいられたが、もしも震災発生時が作業中で全員が集合していなかったら、また施設の利用時ではなく自宅にいる時だったらと考えると、施設利用時環境だけでなく生活しているときに緊急事態が起きた場合のためのマニュアルがあれば良かった。また、盲・ろう者の利用者への支援が少なかったことを反省した。

菅野さんは最後に、これからソーシャルワーカーを目指す私たちへのメッセージとして次のような激励の言葉を述べてくださった。

「今回の震災をきっかけに人と人との関わり・つながりが増えたと感じ、たとえ福祉に関係していないつながりであっても、ちょっとしたことであっても関わりがあればいつか強くつながることができる。学生のうちにいろいろなことに触れて免疫をつけていっても損はない。今しかできないことをしてほしい。今回の報告書もとても感謝している。」

被災者であってもソーシャルワーカーであることを忘れない菅野さんや菅野さんを支えている家族の方々はとてもすてきだなと感じ、このような形ですばらしいソーシャルワーカーに出会えて幸せだと思った。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　安川紗代・小野田優香
分類	インタビュー
プログラム名	特別養護老人ホームＢ
日時・場所	2012 年 8 月 23 日　岩手県
講師・インタビュー対象者	Ａ氏

インタビューの前にＡさんの職場である「特別養護老人ホームＢ」を見学させていただいた。建物自体は残っていたので、実際に中に入って当時の話を聞くことができた。

施設の中はほぼ片付けられていて物はそんなに多くなかったが、片隅には津波が来る前に使っていたのであろう食器などがあった。また建物の外観は残っていたが、中は窓が割れ、さっしが曲がっていたり、壁がはがれていたりなど津波の威力を目の当たりにした。被災した建物の中に入るのはこれが初めてだったということもあってか、施設の廊下は普通に歩けたものの一つひとつの部屋に入るにはなかなか一歩が踏み出せず、躊躇してしまった。

施設見学の後、震災後に高台に作られた仮設のグループホームでインタビューをさせていただいた。Ａさんは施設の職員ということで、普段から施設利用者を担当していたため、震災が起きて最初にしたことは利用者の命を守ることで、他のことには手が回らなかったという。また命が助かってからも多くの問題があった。

まず、介護を必要とする人は一般の方と共通するニーズだけではないということだ。トイレにしても、バリアフリーの設備や広さが必要であったり、オムツやトイレ用品などが必要である。食事も人によっては介護食でなければならなかったり、認知症の方が落ち着かないなど、多くの環境要因により、一般の避難所では生活していくことが困難である。

次に、要介護の場合、医療ニーズが一般の方より多いということ。しかし医療（治療や薬など）が必要であるにもかかわらず、津波によって薬は流失し、利用者個々のデータがなくなってしまったのである。他にも避難所では人手が足りず、ケアしきれないなどの問題があった。そこで行政に支援を求めたが、行政のライフラインも切断されて、地区全体の現状把握でいっぱいの状況であったため、Ａさん自身が車で他の施設に行き、受け入れてくれる所を探したそうだ。その結果、高台にある施設が受け入れてくれることになり、次の日の昼には利用者全員をそこへ移動させることができた。その施設も定員いっぱいだったが、車いすや薬などもあるため、避難所よりは整った環境を確保することができたそうだ。

2 日目以降も行方不明者の捜索とともに、利用者の家族がきて遺体の確認を行った。津波により遺体は損傷していたが、老人ホームということで利用者の服には名前が入っており、確認することができた。遺体を確認した後は火葬をする必要があったが、市役所も火葬場も混乱状態であった。震災当初は、遺体の腐敗を防ぐためのドライアイスや火葬するための棺桶などの社会資源が全然足りなかったが、日頃から支えあいの環境があり、十分ではないが乗り越えることができたそうだ。また、この支えあいの環境は田舎だからこそできていたもので、今の都会ではできないことだから、これからいかに支えあいの体制を作っていくかが今のＡさんの仕事だともおっしゃっていた。

これからの被災地にどのようなボランティアが必要かお聞きしたところ、これからはボランティアではなく、被災者が自立心をもってそれぞれの生活を築いていくことが大事だとおっし

やっていた。震災当初は人手も足りず、物もなく、ボランティアがいなければ生活していけない状態であったが、今は仮設住宅もでき、ある程度生活も落ち着いてきているため、被災者自身の力で自立していく必要がある。それに伴い、これからの一番のニーズは住宅であると話してくださった。仮設住宅はいつまでも暮らせるものではないし、あくまで“仮”の住宅であるから、自立していくためには、まずはしっかりとした住宅を確保する必要があるそうだ。

Ａさんはソーシャルワーカーであると同時に被災者の一人でもあるが、そのことについてどのように思っていたかをお聞きしたところ、「何も思っていない、今を生きているだけ」とおっしゃっていた。震災直後は電気もガスも水道も使えず、今まで当たり前だと思っていた生活がいきなりできなくなってしまった。そこから４月半ばに電気がつくようになるなど徐々に復旧していき、少しずつ震災前と同じような生活を送ることができるようになってきたことがうれしかったという。それを聞き、普段何気なく送っている日常が決して当たり前のことではないのだということを改めて考えさせられた。

最後にこれから社会福祉士を目指す人たちに伝えたいことをお聞きしたところ、「福祉は命を守る仕事である。生活を守ることも大切だが、その根底にあるのはやはり命を守るということだ」、また、「何が起きるかわからないから、リスクマネジメントをしていたとしても予想外のことが起きてしまうこともある。福祉について権利擁護や介護保険などもいろいろと学んできたが、今回の震災によって“命を守る”という一番大切なことを再確認することができた」とおっしゃっていた。

今回、インタビューをさせていただくまで、ソーシャルワーカーの仕事というと利用者の相談を受けたり、何か困ったことがあった時にさまざまな社会資源を利用しながら手助けしたりすることだと考えていた。しかし、それらは利用者の命があってこそできるものなので、まずは命を第一に考え支援していくことが大切であるということを理解することができた。

作成者（大学名・氏名）	中部学院大学　廣野美月・小川侑希・石川智也
分類	インタビュー
プログラム名	チャレンジドまちかど相談室“リンク”
日時・場所	2012 年 8 月 23 日　岩手県陸前高田市高田町
講師・インタビュー対象者	相談支援専門員　近江雅喜氏

陸前高田市の障害者支援施設の社会福祉士の近江さんにお話を伺った。近江さんは、大学卒業後、知的障害者の施設に就職し、36 歳のとき社会福祉士の資格を取得後介護支援専門員の資格を取得し、現在は相談員として働いている。

平成 8 年から地域在宅サービスが国の福祉事業の一つとして、人口 30 万人に対し社会福祉士を 2 人配置するよう定められていて、岩手が直ぐに動いた。県内に 18 人のワーカーを配置され、岩手県は全国 2 位である。平成 11 年 10 月から現在の福祉構造が確立された。

被災当時（初期支援活動）

被災当日は隣町で、知的障害者の児童の学校通所について話し合いを行っていた。地震発生時には、振動が止むまで建物内の物を抑え続けていた。振動が止んだところで表に出たところにある児童養護施設のグラウンドで職員の下、近辺の利用者の安全確保を行っていた。近江さんは、自身が直接関わる利用者が施設の形でないため、そこに介入はしなかった。今回の振動でスマトラの大地震の事を思い出し、我家に帰ることしか頭になかった。車での移動中は、慌てる人や先を争う人はいなかったので問題なく戻れた。並ぶとかは日本人の小さい頃からの教育の成果だと感じた。自宅に戻った後には、ラジオを元に動いていた。高田に入ってラジオで津波の高さが 10ｍと聞き、「母親の下に向かうのはもう無理だ。」と迷いながら判断した。津波の訓練を事前に行っていた自主防衛組織が動いてくれると思い判断し、自分の退路を作ることができたが、町中が津波の被害に遭い、瓦礫と海水で埋まっている光景を見た。とても信じがたい状況だった。グランドに戻ったら多くの住民が避難していたので、他の職員と相談し施設の小さい体育館へ受け入れるようにした。当時 100 人以上の避難者と利用者 70 名がおり、流されてしまった 7 箇所のグループホームの利用者さん 28 名や職員を含め、全体で 250 名ぐらいの方と夜を明かした。非常食があったので避難者の食事をわずかながらの提供ができた。避難時には、騒ぎになるような出来事は私が見ている中では無かった。

本業の相談支援活動はできず、2 日目から安否確認が行われた。市からの要請で救助された方の受け入れを中心に搬送活動など行なっていた。震災直後はガソリンが無く、道も無く、道があっても家が流されており、誰が何処にいるかわからない状態。携帯電話もつながらなく、

福祉事務所の職員が 300 人中 68 人も亡くなり、いつも組んでいた職員がいなく連携も取れない状況のため、活動が制限され重度の身体障害者 2 名の対応以外は活動ができなかった。

4 日目に母を訪ねて避難所へ向かったが、避難先の殆どがやられていたので誰がどこにいるか分からない状況で見つけられなかった。その後警報が出て戻れなくなったので、自分の町の避難所で一夜過ごしたが、寝るスペースや寝具、寝室環境が悪く寝難かった。翌日も津波の警報等も多く、移動も困難な状況であった。以後は避難者の要望を受けるといった中間の役割を行った。物資の搬送や市からの依頼で、遺体安置所への市民の搬送なども行なっていった。

11 日目にガソリンが戻り本格的な活動が行えるようになったが、事務所が流され 12 年分のデータも無くなり、情報が無く、記憶を頼りに安否確認に動くしかなかった。3 月 25 日ごろから携帯電話が使えるようになった。自分の電話には着信が多くあったが、相手側としては決意して相談の電話をかけてきていると思い、その思い感じながら全てかけ直した。

物資や各団体との連携について

物資は被災当日から届けられ、施設内で物資の仕分けや届ける作業を 10 日間程行った。10 日目以降になると自衛隊のお風呂が設置された。入浴するために避難所からマイクロバスで送迎を行い 9 時に入浴し、30 分後に避難所へ送迎をした。自衛隊の人とは、7 時から行動をした。自衛隊の方が運んでくれた入浴時の縁の高さなどお年寄りの方や体の不自由な方には不便であったりした。後に入った相談支援の中でもお風呂に関する相談は多かった。

ボランティア団体からの連絡も多くあり、各事業所との仲介に入り、支援にきてくれた方に「何をして欲しいか」などの施設側の思いを伝えた。3 月 27 日から保健医療福祉の連絡会議が開催されている情報を聞き、障害関係の職員と関わり、今後のことについて話し合えたが、詳しくはできなかった。この頃にはパソコンで情報整理ができるようになった為、県や手話通訳といった支援との連携を取れるようになり、誰がどこにいるか把握ができた。ボランティアの人は県から何人来るかなどの情報がきて、それをもとに調整を行った。応援に駆けつけてくれた職員は以前より岩手県が力を入れていたコーディネーター事業の方が多かったので、こちらから指示することもなかった。また、他の職員が自身の意思で行動して地域ごとのコミュニティー形成を素早く行っていた。地域は支援をしようと、しなかろうと、地域で行っていくべきことを理解して行えており、予想以上に地域力と連携が図られていた。

中期支援活動

避難所を回る際は、既に保健師らが一巡二巡と回っていたので、最初に回るときには無茶せずに代表の方を中心に、緩やかに回ることにした。県のスタンスとしては漏れ無くということなので、二巡目からは手帳を持っている方は個別訪問で回ることにした。ほとんどトラブルなく 5 月の末まで続いた。また 4 月の末からは全戸訪問になり範囲が広くなっていった。身体・知的障害の方は積極的に回っていった。精神疾患の方は慎重に回った。保健師は全部回っていたが、精神の方は最終的に半分しか回れなかった。大槌町の方でアンケートを作っていたので、それを使用させていただきながら、上手く回ることができた。

具体的な相談の中身としては、最初は障害といった区別は無く色々な相談を受けていた。一番多かったのはお風呂について。デイサービスのお風呂も当初は動かなかった。私の施設は一週間ぐらいでお風呂を動かすことができた。対策本部が近く電気が早く来るようになり、3 月

10 日には重油も満タンにできた。2 週間のうちには避難者にも開くことができ、ボランティアとして送迎や特浴なども動かすようにした。一番不安なのが、見通しが立たないこと。いつになったらお風呂に入れるのかがわからない。お年寄り関係者と誰とでも連絡つく関係があったので、クライエントのケアマネさんと直接連絡取りながら、先の見通しが見られるようにした。

重症児の方の相談では、最初は「大丈夫です」と言った反応であったが、重ねるうちに「実は・・・」と言った相談がちょくちょく出てきた。また、特殊サイズのオムツの不足があった。支援団体の方に要請し、東京などで用意してもらいながら対処していった。情報がないと動けなかったが、情報をもらって初めて動くことができ、それらが最初の組織的な活動になった。

避難所での問題点・相談

アルコール中毒の方と知っていて避難所に入れたことが問題となっていた。何ともならない状況もあったが、周りもなんとかしようとする姿勢があった。そこは人口芝の上にテントが立っている所で、暖房を焚くと雫が落ちてくるので、大きいテント内に小さなテントを（1 世帯につき 1 つ）立てて個室となっていた。そうした条件であったのでプライバシーを確保することができたところもあった。条件によって受け入れられる方も異なってくると思う。それ以外の相談で、大変で困っているだとか、そこに居られないといった相談は少なかった。

精神障害のある子どもで、被災時には精神的に不安定になってしまい声を上げたりする子がいたり、過去の事に尾を引いてしまう子がいた。精神障害のある子どもの対応には、その時々に臨機応変さが必要であった。避難所などの特殊な状況などで、失禁を起こす方もいた。民生委員の方とも協力しながら、施設に引き取るなどの対応などしていった。

避難所内の相談は回れたが、在宅の相談を回ることが困難なため、訪問が困難だが必需品の水を持ってくることを理由に関わっていった。しかし水道が早く復旧したため、同じように介入ができない在宅もあった。訪問する理由がないと関わることが困難だった。他にも今後の見通しが立たなく、衣服・物資のオーダーなど分類関係なく、要望や相談があった。

仮設住宅

仮設への移動は早い人は 6 月から、おおよそは 7 月末までで、それ以降の要望は少なかった。8、9 月は数的に少なく、残っていた方が移っていかれた。避難所では、岩手県からの情報により誰がどこにいるのかわかっていたが、仮設に移動してしまうとその部分がわからなくなってしまった。障がい者自立支援協議会で、緊急時に対応をとっていただくよう要請はしていたがダメな感じはあった。少し納得できなかったが、県や市の膨大な資料に則って、1 件 1 件回って情報を集めていった。

仮設の方からの相談は少なく、住宅改修の相談は 2 件ぐらいであったが、不都合なことも多く、県などの責任者と思うように連携が行かなかったりした。結果的に障がい者支援センターのほうで支援することになった。トイレ・お風呂を利用する上での不便なことに対する相談が多かったが、お金等の都合により本人が我慢する状況もあった。就労・失業といった相談もあった。失業の方は、通所の施設に通い就職活動を行っていた。わりと仕事があり、就職率も悪くなかった。

震災時の社会資源

精神疾患の方の集いの場の役割として「地域活動支援センター」があったが、流されてしまった。しかし元々できてから半年足らずしか経ってなかったので、そこまで影響はなかった。通所施設もほとんど大丈夫であり、余力もあったので、従前に近い形で利用できるものはあった。職員の方がまたは家族が被災し他へ移って行ってしまったこともあり、招集をかけても中々集まらなかった部分には困難があったが、他と比べると、施設・事務所間での連携は取れていて、ある程度整っていた方である。しかし、「だから大丈夫です」とは軽々しく言えない。まだ知らない所で、困っている方がいたのではないかと考えてしまう。100％確認しないことには軽々しく言えない。困っている方、困っていた方、何も言えなかった方がいたのではないかと不安にも思っている。

今後必要な資源・活動

震災に関係なく重要な事として、「移送サービス」がある。普段は病院や市役所には、電車やバス車といった移動方法があるが、できなくなった場合の移動が障害者にとって必要である。今は、支援団体が入り、移送サービスや買い物サービスといったお手伝いがあるがこれは長くて 1、2 年しか持たない。しかし、その 1、2 年で復旧できるかわからないので、どうするか考えていく必要性がある。

また、地域の集会場が流されてなくなってしまっているので、大勢の人が集まる場がない。今は、小さな仮設の場での対応で手話や囲碁のクラブ活動を行っている。

今回の震災では、全く動けなく、その間にも困っていた人がいた。今後の震災では初動体制づくりを普段から行っていき、何時どういう状況でも関係者が連絡をとれるような初動づくりが必要である。福祉避難所や 2 次避難といった精神障害のある子どもへの対応ができる場所の親への周知をさせておくことが必要である。

これまでに話し合いの中で見逃してきたことを考え直して行かなければならない。陸前高田の中で福祉関係者が集まって話し合いは行われているが、何処でどのようにまとめられているかわからない現状がある。今現在、自分の地域について何処でどういったことがまとめられているのかを知り、発言していく必要がある。

インタビューを終えての感想

今回の震災では、普段当たり前に使用している物が使えなくなり、移動・情報獲得手段が全て使用できなくなった。近江さんは、その状況で「何も出来なかった」と言っておられたが、お話しを聞く中で避難所の確保や職員の役割の理解など何もない状況で、行動できる事が一番相談員として大切なことなのだと感じた。そういった職員の行動力から、避難者の混乱が少なかったことや地域形成が早かったことにつながったのでは無いかと思った。

近江さんの経験から、初動体制づくりを事前に行うことや障害者への対応が必要だと伝えて頂いたので、この思いや考え方を１人でも多くの方に伝えていくようにし、今後の被災時の対応や被災時の声というものを知ってもらうようにしたい。

作成者（大学名・氏名）	日本社会事業大学　中橋欣子
分類	インタビュー
プログラム名	大槌町地域包括支援センター
日時・場所	2012 年 8 月 24 日　岩手県上閉伊郡大槌町
講師・インタビュー対象者	元持翠氏

岩手県に到着して 4 日目、わたしたちは大槌町地域包括支援センターの元持翠さんにお話を伺った。

震災が起きた 3 月 11 日、元持さんは実家のある大槌町ではなく、盛岡市内にある施設でデイサービス相談員として働いていた。そこの施設に津波の被害はなかったものの大地震による盛岡市全域の停電状態が 3 日間続いた。元持さんを含む施設の職員は停電の間施設で寝泊まりし、利用者の安全の確保、スーパーへの買い出し、炊き出し、市からの配給車の依頼などで走り回っていた。電気がなく情報も入らないので、大地震に加え大津波が太平洋沿岸に甚大な被害を与えたことなど知る由もなかった。大槌町に住む家族の安否は気になっていたが、ちゃんと避難しただろうと思っていたそうだ。

3 日目に避難者名簿の情報欄で家族の無事を確認。4 日目、盛岡市内ほぼ全域に電気が復旧し、テレビを見てそこで初めてこの震災の凄まじさを知った。急いで職場に、4 月から働く予定だった大槌町地域包括支援センターへの 1 か月近く早い異動をかけあった。そして、震災から 1 週間後にして盛岡市から大槌町へ帰ることができた。

大槌町に到着して、まず災害対策本部に向かった。専門職の人たちは炊き出しや、介護を必要とする人たちへの支援などで避難所から身動きできない状態であった。元持さんも同様に避難所を担当する保健師から指示を受け、物資を運んだり、床ずれなどの問題を抱えている人がいないか人づてに聞いて確認したり一日中走り回った。

4 月に入り、避難所の状況も少しではあるが落ち着いてきたころ、地域包括支援センターでの本格的な業務が始まった。自力での入浴が困難な方への入浴支援として、利用者を受け入れてくれる施設を探し、トイレが困難な方には福祉用具を支給し、どこかから要介護者の連絡をもらえばアウトリーチを行い、保健師やケアマネと連携を図りながら避難所解消に向けて走り回った。

元持さんは、大槌町に到着してから避難所解消までの間のことを次のように語ってくれた。

「避難所のときはずっと混乱状態で自分自身いっぱいいっぱいで本当に必死だった。この生活がいつまで続くのか、何をすればいいのか、何ができるのか思い悩んだ。山と町の間にあるトンネルを通るときには今までのことは悪い夢でこのトンネルを抜けたらいつものような街並みがあるのではないか、となかなか現実感もわかなかった。何をするにも始めから。避難所にいられなくなった人たちの受け入れ先がなかなか見つからない。利用者の希望通りにならな

いこともあった。同じ環境で働く人たちと『今はただ体を壊さないように、がんばりすぎないように、自分にできることをやってゆっくり進んでいこう』と声をかけ合い、励まし合いながら目の前のことに打ちこんでいた。」

利用者の方々との関わりの中で顔を覚えていてくれたり、「よかった」と声をかけてくれたことも元持さんにとって大きな励みだった。

亡くなった大槌町地域包括支援センターの職員の方が登録していたという日本社会福祉士会の業務支援では、津波で流されてしまった台帳を在宅の高齢者の家にも一軒一軒まわって作り直してくれたとのこと。その台帳は今でも大切に使用されていて、とてもありがたいものだったそうだ。さらに日本社会福祉士会は業務支援の派遣チームを交代で送り込むらしいのだが、その際にはしっかりと引き継ぎをして、なおかつ継続した支援者支援を行う、という災害支援において大切な役割を果たしている。

このようにして8月中旬に避難所解消という一つの目標を達成した。

避難所から出た人たちはそれぞれ施設や仮設住宅、仮アパート、親戚の家などで暮らしていくわけだが、そこで問題になったのはやはり一人暮らしになった高齢者の方々であった。孤独死問題である。もちろん福祉職として働いている人たちは決してそんなことにならないように注意深く民生委員や仮設の管理者の人たちと連携をとり、頻繁に利用者宅を訪問した。しかしメディアでは孤独死問題のことが大きく騒がれた。それが町民の方たちの不安を煽ったそうだ。まだまだ課題はある中で、報道に左右され余計に不安を増幅させられるのは福祉職として本当に辛いことだっただろう。

避難所解消からの支援では他にも、今までと全く違う環境の中で生活しなくてはならなくなったことにより、近所間や家族内でのトラブルが生じたり、利用者が仮設から他の場所へうつってしまって連絡がとれなくなってしまったり、とさまざまな問題があったようだ。そんなときは元々大槌にある目に見える関係性が強みになったそうだ。同時に、もっと地域のコミュニティを把握していれば解決スピードがもっと違った、とも語っていた。

上記のような経験を活かし現在はLSAとも連携をとりながら見守りをしているため初めの頃に比べて状態はだいぶ充実している、とのことだった。

震災から1年半経過した今、これからの課題は仮設で生活している方と在宅で生活している方の間に生じてしまった距離を改善していくことだと話された。仮設の方が在宅の方に対して「家があってうらやましい」という感情と、それに対する在宅の方の仮設の方に対する遠慮の溝を埋めるのは容易なことではないと思うが、少しでも地域コミュニティが再構築に向かうようソーシャルワーカーならではの知識や技術を用い連携を図って、新たな住みよい環境を作り出していってほしい。

最後に元持さんは「今回の震災で強く感じたのはいかに人と人のつながりが大切か、ということ。誰かとつながることができれば

何か恩返ししたい。ここまで来たが今からが長い。自分もつなげる人になりたいし、みんなにもつなげる人になってほしい。」と語ってくださった。学生のわたしたちにできることはソーシャルワーカーが用いる本当の資源は環境よりも先にヒトだと理解し、忘れないこと。微力ながらもできるだけたくさんの人々にここで出会ったソーシャルワーカーの方々の働き、想いを伝えていくこと。継続すること。そして必ず来てしまう次へ活かすことだと感じた。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　白鳥実葉
分類	インタビュー
プログラム名	宮古市社会福祉協議会
日時・場所	2012 年 8 月 24 日　岩手県宮古市小山田
講師・インタビュー対象者	地域福祉課主査　有原領一氏

二次派遣チームは、宮古市社会福祉協議会地域福祉課主査の有原領一さんにインタビューをさせて頂いた。有原さんは、平成 13 年社会福祉協議会に就職。入職 11 年目のソーシャルワーカーである。これまで主に地域福祉の業務をしてこられ、ボランティアセンターや共同募金、地域支援、低所得者の支援の業務をされてこられた。

まず最初に、災害時のお話を語って頂いた。震災当日、有原さんは、たまたま 2 階におられ、地震発生直後に 2 階のデイサービス利用者 60 人を近くの高台にあるごみ処理場へと避難させた。そして幸いなことに当日の夜には、施設に戻ることが出来た。避難された方は、デイサービスの利用者であるため落ち着いたら自宅に帰れるようにしていたが帰れない方もおられ、その方たちと 1 週間過ごされた。施設の設備は、電気に関しては公共施設であるため、復旧が早かった。また施設には毛布や暖房器具もたくさんあり、暖を取ることができた。食料に関しては、職員 3 人で 100 人分の食料を集めるためスーパーを回り、少し遠いところであったが、好きに持っていって良いという生協が見つかり、そこで米やバナナなどをかき集めて食料を確保したそうだ。

また震災発生 2 日後には、災害ボランティアセンターが立ち上げられた。最初のうちは、支援物資の仕分けや配送がボランティアの主な仕事だった。しかしその後、避難所の運営にもボランティアが派遣された。当初は、地域の方や市の職員が避難所の運営をしていたが、その方達にも疲労がみられたため、ボランティアの力を借りることになったそうだ。

様々な方々がボランティアに駆けつけたが、その中でも地域の高校生が本当に良く働いてくれたと有原さんはおっしゃられた。高校生 70 人、80 人が自転車でやって来てスコップ片手に泥出しに行って、夕方に帰ってくるということがしばらく続いたそうだ。地元の高校生だからこそ土地勘もあり、何かあった時にはあそこに行けばいいと指示するだけで十分であった。宮古市ではそれほど高校生にとって社協という場所が浸透していた。ボランティアセンターは、震災前からあり、日頃から福祉教育活動を行ってきたのでボランティアと聞けば社協に行けばいいという感覚があったのだろうとおっしゃられていた。

4 月頃には、1 日に 200 人ほどのボランティアが来るようになっていた。早い段階から支援してくださっていた地元の人たちや各種団体は、初めはそれぞれ別々に活動していたが、次第にその中から団体が出来上がっていった。またそのメンバーに現場のボランティアの指揮も任せることが出来るようになったそうだ。ボランティアの方にリーダーを任せることで、ボランティア同士気持ちが分かるのでとても助かったそうである。YMCA のような青少年育成団体も長期的に支援してくださり、その助けはとても大きかったそうである。しかしたくさんのボランティアを受け入れるなかで、中にはお弁当を食べる時に「こんな汚いところで飯を食わせるのか」と言われる方もいてショックを受けたそうだ。また 1 日、2 日来て、とりあえず文句を言って帰っていく人もいたそうだ。

有原さんご自身は、自分がやるしかないという思いで、震災時から休む間もなく働いてこられたそうだ。有原さんは、もともと宮古という町に変わって欲しいという思いがあった。「これも実はひとつのきっかけなのではないか、今変えなきゃたぶんもう二度と変わらない。今変わってもらえるようにいろんなものをつないでいく、いろんなものをかき集めてつないで創って、今がんばるしかない」という風に語ってくださった。町からの若者離れを食い止め、彼らが残ってくれる活気のある町へ変えていきたいというのが有原さんの思いだ。

また有原さんから、社協のソーシャルワーカーだからこそ出来ることも教えていただくことが出来た。「誰かを支えなきゃいけないときに広く仕組みをつくる、いろんな機関をつないで仕組みをつくる、社協にいることでこれまでなかった新しい仕組みをつくることが出来る。安定してからだと制度上ああだこうだと言われる。今やらなきゃもったいない。上手くいけばひとつのビジネス、ボランティアとして定着するかもしれない。これから想定されるニーズに対して対応できるようになる。」と力強く語られた。

最後に今回の震災を通して、伝えたいことをお聞きした。「今回全国の皆さんにすごく助けられたので私たちも、次にどこかで同じようなことがあれば支援していきたいし、そういう意識を皆さんにも持ち続けて欲しい。どこかで何かあった時にお互いに助け合う。そんな気持ちを大事にすること。実際に支援するときには被災地の方が言っていることに対してなんでって言わないで、被災地で出てくるニーズを大事にしてほしい。次にどこかで災害が起こった時に、東日本の時はこうだったというスタンスで次の被災地を支援しようとすると絶対に現地になじまない。次の被災地でどんな支援が求められるのかは次の被災地にいってみないとわからない。地域性を大事にした支援を大切にしたい。」と語ってくださった。

今回のインタビューを通してソーシャルワーカーの力強さ、その職務の重要性を学ばせて頂いた。被災した状況の中にあっても、これからの宮古市を見据え、以前より良いものを目指しておられる姿に感銘を受けた。またソーシャルワーカーが、ボランティアの調整など人を陰から支えるような表に出ない重要な役割を担っていることを今回のインタビューを通して改めて感じ、その職務には重い責任とやりがいがあることを知ることが出来た。有原さんの思いをしっかり伝えていくことで、次の災害に対して備えることが出来ると考える。

作成者（大学名・氏名）	中部学院大学　古川友子・石川智也
分類	インタビュー
プログラム名	釜石市保健福祉部高齢介護福祉課　地域包括支援センター
日時・場所	2012 年 8 月 24 日　岩手県上閉伊郡大槌町
講師・インタビュー対象者	介護支援専門員　千菅英理子氏

釜石市地域包括支援センターの千菅さんにお話を伺った。千菅さんは被災時、釜石市ではなく大槌町の地域包括支援センターで働かれていた。そちらは直営であり、町の職員として 12 月まで大槌町で勤務されていた。

大槌における初期支援活動（被災直後）

地震発生時、千菅さんは釜石市でケアマネの合同研修会に参加していた。研修会は中止になり、それぞれ事業所へ戻られるなか、千菅さんは 1 人で大槌町へ戻る途中で津波にあわれた。大槌に戻ることを考えたが動ける状態ではなく、民家でお世話になり 1 晩を過ごした。翌朝、他に避難していた大槌の方と一緒に歩いて大槌へ戻るが、大槌は津波の他に火事による被害が大きく、災害対策本部にも火の手が回っていた。そのため、これから避難所となる場所へ行ってほしいという事で、金沢地区の避難所で 2 週間支援を行うことになったが、「この日はどれだけ歩いただろう…。」と思うほどであった。

避難所で行った支援は、避難されている人の名簿作りから始めた。着の身着のままの状態の方が多く、サンダル履きのまま、鞄も持っていないような状態。お歳の方からの血圧や眠剤などの薬がほしいという要望や、遺体安置所を回り家族が亡くなったことを確認したが、財布も持たない状態で、「この先どうしたらいいのか…。」という相談が多かった。1 つ 1 つ求められることに対し、ちゃんとしたことを示せるまでに時間がかかり、“応えることができない”ことが辛かった。阪神や新潟の震災時の支援は、どのようなものだったのか事前に知っていれば、「大丈夫、ちゃんとやってもらえるから。」と言う事もできたのではないか。

3 月末から本部へ戻る。本部に戻ったその日のうちに社会福祉法人の施設を回り、避難所を回り、翌日には「高齢者の相談窓口」をみんなが集まる場所に設置した。津波の被害が大きかった大槌町は役場が流され、現地職員も 40 名が亡くなられた。包括支援センターは 3 人の方が亡くなられてしまい、主任ケアマネである千菅さんと、事務職 1 人、保健師 1 人、の 3 人で対応することになる。福祉が高齢者が…というより、対象は町民全体。とにかく、今、目の前にある仕事をしていた。2 年おきに実態把握をして、きちんと整理してきた 5 千人分の高齢者台帳が流されてしまったので、残った者たちの記憶を頼りに資料作りをし、新しい事を作っていくしかない状況であった。そんな中で電話が通じず、情報が伝わってこない状態なので、1 つの事を解決するのに 1 日がかりだった。普段なら電話で 5～10 分、書類を書いてもらっても 1 時間で済む問題を、遠く離れた避難所まで自転車で何往復も通い対応した。高齢者が多く避難されている避難所もあり、普段通っていたデイサービスやデイケアへ行けない状態が長く続くのは良くないということで、移動や調整を行った。自衛隊風呂に入る場面では、またぐことができずお風呂に入れない方への対応を行った。社会福祉士会の方には、これから必要となるであると思われる権利擁護の支援をお願いし、震災前 1 人暮らしをしていた方たちが今どうな

っているのか、実態把握的な部分で助けて頂いた。避難所で認知症の方が見つかり、迎えに来てくれたご家族との関わりに触れ、「まだまだ捨てたもんじゃないなぁ」と安心するような場面もあった。

中期支援活動（仮設住宅・避難所移行後）

5 月末から仮設住宅への移動が始まる。大槌は町の半分がなくなった状態のため、仮設の建った場所は急な坂道が多く、移動入浴車が来られない。足の悪い方や杖をついている方から場所を変えてほしいという相談が多く、包括の担当ではないが、係の人に口添えをするような支援を行った。入居する際に支援が必要な方は、一緒に説明を聞きに行き引越しを手伝った。段差や砂利道、お風呂場の手すりや頭をぶつけてしまう洗面台を取ってほしいなど、さまざまな不具合についての相談に応じた。現在では追い焚き機能や倉庫、スロープが付くなど、徐々に良くなってきている。

ボランティアの対応については、もちろん有り難かった部分が大きく、毎日継続して支援をしてくれた団体にはお風呂をお願いすることもあった。だが、個人で短期間のボランティアさんが「何かないか？」と来られた時、こちらも手一杯な中で対応に困った部分もあった。また、対応をしてもらって引き継ぎをした後、「これって誰のこと？」とわからなくなってしまった事もあった。その点、自分たちで相談対応をし、要点をまとめ、記録をとり、報告・引き継ぎなど、やるべきことをきちんと行ってくれた社会福祉士会の方の支援は、大変助かった。ボランティアを行う際にも、受け入れ側に負担のかからないような方法で行うことが大切だと感じた。

釜石での中期支援活動

千菅さんは、12 月まで大槌で働かれ、異動で釜石の地域包括支援センターへ移ることになる。同じ被災地でも大槌と釜石の状況では、町の中の残っている部分、残っている情報（釜石の庁舎は 1 階部分が被災したものの、データは無事であった）、住民の意識など、全く違ったものがあった。また、保健師さんも相談に応じている中で、協働の意味が少し違うのかな…？と、連携をとるのが難しい面もあったそうだが、社会福祉士だからこそできる仕事、福祉の目だからこそ気付ける部分を、1 つ 1 つしっかりやっていくことが大切だと感じた。釜石でも仮設からの相談が多く、ご家族が亡くなられたことで世帯が変化し、お一人で暮らしている人や、介護認定を受ける人、要支援者などが仮設住宅の中で増えている印象があった。釜石では今年 9 月中旬までに、意向調査を出さなければならない。復興住宅に入るのか、それとも自力再建をするのか選択をするという調査である。訪問先の 80 歳と 77 歳のご夫婦からは、「この先私たちのような手がかかってしまう者が、復興住宅に入っていいものか？」「集合住宅へ入って、みんなに迷惑をかけるのではないか？」「元気なうちに有料老人ホームや施設へ行った方がいいのではないか？」、という相談を受けた。市内には多くの施設はなく、遠方へ移らなければならないとなると、離れるのはどうだろう？環境が変わって生きていけるだろうか？と迷ってしまい、なかなか自分たちでは決められない。こちらからこうしなさいと言えることではなく、とても難しい問題だと感じた。

ソーシャルワーカーの仕事とは

高齢夫婦に限らず、仮設住宅での暮らしは“借り物の生活”。どこまでいっても落ち着かないような気持ちを誰もが抱えている。落ち着かない生活は、この先どうなるのか…という不安な気持ちを生みだす。私たちの仕事ってなんだろうと考えた時に、「そういう立ち止まってしまっている気持ちに根気強く寄り添って、一歩踏み出すことを見守り支えていくことが、私たちにできる仕事なのかな…。」、これこそ、大切にしなければならない“福祉の目線”であり、ソーシャルワーカーだからこそできる仕事であると感じた。

すごく良い体験ができたことがある。それは、生活再建支援金の受付業務。これは包括の仕事ではないが、他に行える部署がなく福祉課全体が共同で行っていた。亡くなったお子さんやご家族の義援金の申請を受ける際、どこで亡くなったのか、どんな状態だったのかなど、被災した方々の想いに触れることができた。死亡が確認されている人は良いが、行方不明の方は通常より早い 3 か月で死亡認定ができることになった。だけど、「本当にそんなことをしてもいいのだろうか…」という大変な想いをしながらの受付であった。淡々と行えるような仕事ではなく、これを役場職員がすること自体、どうなのだろう？ちゃんと想いを聞ける人たちでやった方がいいのではないか？と思った。家は無くなったが家族みんな無事という人もいれば、お子さんとご両親、家族 5 人を亡くされ 1 人残られた方もいる。たくさんの人たちの想いに触れる中で、丁寧にその想いに触れ、いろんなことに応えていきたいという思いが強くなった。相談というのは誰でもできる人がやればいいというものではなく、きちんと相談について学んだ人がやるべきだと思う。それは、相談員・支援員の“質”の問題にもつながる。

心に残るインタビュー

千菅さん含めワーカーさん自身も被災者であり、家族の安否もわからないまま、町民・市民のみなさんのために働いてこられた。「私たちみんな、よく働いてきたなぁ、と思う」と言われた。また最後に「忘れないでほしい」と、その想いを次のように語られた。

「普通の毎日が一瞬で奪われてしまい、あたり前だったことがあたり前でなくなる。この辛さは、実際その身にならないとわからないものであるが、いつどこで起こっても不思議ではないことだ。決して他人事ではない。この仕事を目指すのであれば、決して“対岸の火事”で終わってほしくない。時間が経つにつれて忘れてしまうものかもしれないが、私たちの暮らしは、今続いている。辛い状態で落ち込んでしまったり、閉じこもってしまったり、亡くなられてしまったりする方もいるという現状がある。“被災”と一口ではいえないような状況がある。想像つかないかもしれないけれど、その辛さをイメージしたり、寄り添ったりする気持ちというものを忘れてほしくない。」

自身が被災者でありながらよく働いてこられたと思われたことと、「忘れないでほしい」という言葉。この二つの部分が千菅さんの思いを特に強く感じられたところであり、心に残った

部分である。

インタビューを終えての感想

ご自身の精神状態も厳しい中で、人々の相談や不安を聴く仕事というのは、本当に大変であったと思うし、職員さん同士、お互いに話を聞きながら支え合い、励まし合い、先が見えない中で頑張り続けていたのだと思う。みなさんの生活を支えるために必要なワーカーさんだからこそ、そのメンタル面へのサポートの必要性を感じた。普段聞き役に徹しているワーカーさん自身が、話すことができる“場”というのも大切だと思った。今回インタビューに応じて下さった千菅さんは、とても穏やかな声・口調で、優しい笑顔でお話して下さった。被災後不安な状況の中で、この笑顔はどれだけ周りの人たちに安心感を与えただろうと思った。ソーシャルワーカーって大変だけど、とても素敵な仕事だと思った。

「忘れないでほしい」という言葉を聞いて、千菅さんの想いが、まっすぐ心に届いた。千菅さんから受け取ったこの想いを、1 人でも多くの人々に伝えるという責任が、私たちにはあると感じた。私にできることは大きなことではないけれど、等身大で感じてきた想いを、しっかり伝えていきたいと思う。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　桝田綾子・大木達也
分類	インタビュー
プログラム名	Ｂ町社会福祉協議会
日時・場所	2012 年 8 月 24 日　岩手県
講師・インタビュー対象者	Ａ氏

8 月 24 日の午後、淑徳大学チームは二度目のインタビューに臨んだ。

インタビューは各チームあたり 1 名のソーシャルワーカーに対して、インタビューガイドという書類に沿って実施される。学生 2 名がインタビューを行い、残りの 2 名がインタビュー内容を記録（録音および筆記）する。私たちは、前夜に一度目のインタビューの反省点と改善点、良かった点などを話し合い、二度目のインタビューに備えた。

ご協力いただいたのは、Ｂ町社会福祉協議会の社会福祉士であるＡさんである。Ａさんに、震災当時の状況や思いを語っていただいた。被災地を訪問した後だったので、震災当時の状況がイメージしやすく、Ａさんのお話がとても分かりやすかったことを覚えている。Ａさんは、3 月 11 日の震災当時、勤め先であるＢ町の隣に位置するＣ市にいらっしゃったそうだ。

今までに経験したことがない大きな地震があった直後、建物の電気が消えた。その後は、Ｃ市からＢ町の職場に戻るための山道を通り、急いで職場に戻ったのだという。しかし、職場付近まで戻ってきてみると、職場周辺の民家がなくなっていた。そのときは、何が起こったのか理解ができず、目前に広がるのは見たことがない光景だったので、津波だという意識は全くなかったという。Ｂ町に戻った時、津波は完全に引いていた。付近の人に尋ねると、津波が来たのだと聞かされ、これは大変だと思い、職場に戻った後は、「今後どうしたらよいのか」と職場の人間同士で話し合い、すぐに行動に移したのだそうだ。

Ａさんは、「最初は何もできずに、ただ目の前にいる人々のケアをしていただけです」と仰った。それは言い換えれば、“専門職”としての仕事をできない状況にあったということになる。大学では、社会福祉士の仕事は社会資源を活用してクライエントのニーズを共に解決していくことだと学んできた。しかし、ただでさえ限りがある社会資源が、震災でさらに少なくなってしまった。けれども、社会資源というのは、施設や機関、設備や物資などのことだけではなく、人材や労働の意味も含んでいる。社会資源には人間と言う資源がある。Ａさんをはじめとする被災地のソーシャルワーカーは、それを見つけて（資源を生み出して）、多くの被災者を支援していったということがわかった。

「何もないところから資源を生み出す」。世界的に見ると、紛争地帯で動いているソーシャルワーカーもいると聞いたことがある。Ａさんのお話を伺って、ソーシャルワーカーという職

業の本質（原点）を考えさせられた。

Ａさんはソーシャルワーカーでありながら被災者でもある。そのことについて伺うと、「いつまでも被災者ではいられない。被災したことは事実であるし、間違いはないが、いつまでも支援される側ではいられない。むしろ、今まで支援していただいた方々になにかがあったら、こちらから支援に行く気持ちでいたい。繋がりというものは、そうして生まれる。今回の震災や福祉に限らず、どのような職業にしろ、プライベートにしろ、繋がりというものはとても大事だと思う」と仰られた。その言葉に、被災地を訪問して“現実”にショックを受けていた自分のほうが救われた気がした。さらに言うなら、大規模な災害に限らず、人間と人間の繋がりが如何に大きく、大事なものなのかということを再確認できたインタビューであった。

最後にＡさんは、私たち学生に次のようなメッセージを残してくれた。

「あまり気負わずに。福祉、福祉と考えてばかりいると、視野が狭くなってしまうと思うので、それではかえってよくないかもしれない。そのためには、もっと様々なことに興味をもって、アンテナを張り巡らせてください」と。

私はそのメッセージに対し、福祉の分野に限らず、如何なる分野でも福祉の視点のみで見るのではなく、さまざまな視点から物事を柔軟に見るということが大事なのだと感じた。

Ａさんへのインタビューが終了した。被災の中でソーシャルワーカーが何を感じ、被災者をどう支援してきたのか。ありのままを話してくれたＡさんのためにも、私たちがその声を伝えていきたい。

作成者（大学名・氏名）	中部学院大学　小川侑希・廣野美月
分類	その他
プログラム名	インタビューを終えてのミーティング
日時・場所	2012 年 8 月 24 日　いこいの村岩手
講師・インタビュー対象者	

各グループで 2 日間のインタビューの反省を 15 分間でまとめ、全体の場で反省内容の共有をした。

＜関西福祉科学大学＞

・ 事前の質問は表面的にしか考えられていなかったため、もう少し掘り下げて考えるべきだった。そのため、質問内容が簡潔にまとまらず質問が長引いていた。
・ 事前学習の時間をより増やし、相手の機関等の情報を個々ではなく共有する必要があった。
・ 質問のタイミングやインタビューの場所等に対する臨機応変さに対応する能力が欠けていた。

＜淑徳大学＞

・ 事前に決めた質問が多いため、固い質問になってしまった。大まかな流れを作り、相手の話に対して自分達で感じたことや考えたことを整理して質問すればより良くなるのではないかと感じた。

＜中部学院大学＞

・ 初日の方は 1 つの質問で多くを語ってくれたが、今日は抽象的な質問で相手が答えにくそうだった。質問を具体的にするべきと思った。
・ 質問側に緊張があり硬い表情なため、話しやすい雰囲気をつくるべきと思った。
・ 事前学習が不足していたため、聞きたいことが聞き出せてないのでもう少しできたらと思った。
・ インタビューの時間配分を、相手の話の流れを意識して話題を切り替える工夫が必要と思った。
・ 分からない地名が出でくるため地図が必要。昨日はできなかったが今回は地図を使い分かりやすかった。

＜日本社会事業大学＞

・ 初めて被災地に来るため現地の視察等で過去や現在の状況を理解することで、インタビューで話してくれる方の状況が理解しやすかった。
・ インタビューする前の準備として行く場所の状況を話しての資料から知識を頭に入れて行えた。その部分を事前によりよくすることで相手に理解している部分を伝え相手が話しやすくなると感じた。
・ 話しての気持ちをあまり聞けなかった。相手にとって言いにくいことだと思うが、そういったことを聞き出せていくことを考えていく能力が必要と感じた。
・ インタビューを受ける側の人が自分の気持ちを整理できるように、どうしてこの質問をするべきなのか考えておくべきだと感じた。
・

所感

互いにグループ内で話し合いそれを他のグループに伝え、どのような反省や改善方法や原因があったのかを学ぶことができた。今後こういったお話を聞く機会の際に活かせていけると思うので有意義な交流の場だった。

全体的に事前の学習不足や個々の学習の成果が出ていないことがあった。そのため、ソーシャルワーカーへの質問の仕方で事前に考えた質問とその場で感じた2つの質問のバランスが重要になってくる。事前の学習でそのお話を聞く方の地域の状況の知識・理解が必要になる。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　大木達也
分類	その他
プログラム名	反省会
日時・場所	2012 年 8 月 24 日　いこいの村岩手
講師・インタビュー対象者	

長距離移動で帰宅が遅くなったことから、予定よりも 30 分程遅れ、二日間かけて行ったインタビューの反省会を行った。

概要としては、各大学で反省点を話し合ったあとで、各校代表者の一人が発表をする。注意点として、「できなかったこと」だけを中心とするのではなく、「次はこうするようにしたい」など、前向きな意見をあげることが挙げられた。

まず始めに、関西福祉科学大学の学生が発表を行った。関西福祉科学大学のインタビューは、半構造化の形式であり、事前に質問内容を具体的には考えず、インタビュー中の相手の言葉を掘り下げ、質問内容を逐次考えていくものであった。反省点として、頭の中で整理しながら質問をしていたため、質問内容を簡潔にまとめることが出来なかったために、質問が長引いてしまったことが挙がった。他にも、相手の所属している機関など、事前の情報を全員で共有し、把握しておきたかったこと、そして臨機応変が足りていなかったことが反省点として挙げられていた。

次に、淑徳大学の学生が発表を行った。反省点として、インタビューしたソーシャルワーカーは、震災当時の気持ちや行動をありのままに話してくれたが、学生側の質問が、教科書の様な硬い表現の言葉になってしまっていたことを挙げた。相手と話していくうちに、感じたこと、考えたことを、質問に繋げられれば良かったと、改善点を挙げた。

3 校目に、中部学院大学の学生が発表を行った。まず良かった点として、時系列に沿って質問が出来たため、多くのことを質問から聞き出せたこと、そして地図等の資料を使用し、インタビューを円滑に進めることが出来た点を挙げた。反省点としては、大まかな質問内容になってしまい、相手のソーシャルワーカーが答えにくそうだったため、具体的な質問が必要であるという点と、学生側が緊張してしまい表情が硬くなってしまっていたので、相手が話しやすい雰囲気作りが必要であるという点を挙げた。

最後に、社会事業大学の学生が発表を行った。良かった点として、インタビュー前の視察で、現地の情報を知ることが出来たので、相手の話を、想像しながら聞くことも出来た。また、そうして話を聞くことで、相手に学生の真剣な気持ちを伝えることが出来、インタビューを順調に進めることが出来た。また、ワーカー自身の質問をすることが難しかったとして、相手を答えやすくするような質問作りが必要であると反省点を挙げた。さらに、相手が考えながら、整理しやすい間のとれたインタビューが出来るとさらに良くなるだろうと続けた。

各校、意見や反省点が十人十色であることに、とても驚いた。インタビューの質問方法や、反省点などもそれぞれ違い、情報交換がとても有意義なものとなった。それぞれの大学の特色が垣間見え、改めて貴重な経験であると感じた。

作成者（大学名・氏名）	中部学院大学　小川侑希・廣野美月
分類	その他
プログラム名	まとめ
日時・場所	2012 年 8 月 25 日　いこいの村岩手
講師・インタビュー対象者	

参加学生間で今回のプロジェクトを通して感じたことを共有した。

＜中部学院大学＞

- 地元の地域で震災が起きた場合に、何か行動をしていきたいと深く感じた。今回学んだ事を自分の言葉で伝えていきたい。
- 事前の学習が不足していることがあった。インタビューされた方が「忘れてはいけないと言いながら、忘れてしまう方が多くいる」といっていた。今回自分が学んだ事は忘れてはいけないことなので、他の人にどう伝えていくか考えていきたい。
- 実際の被災地のソーシャルワーカーは自分も被災しながら家族の状況も分からないままで活動することは大変で苦しいことだと感じた。
- 「忘れて欲しくない」ということを色んな形で伝えて行きたいと思う。
- 被災の状況は 1 つひとつ違っていた。心の面が強く感じたのでそういったことを伝えていきたい。

＜淑徳大学＞

- プロジェクト前は被災地のソーシャルワーカーの活動や話がどういうのか想像ができなかった。ソーシャルワーカーは人と連携をしていくひとりの人と感じた。
- 自分が所属するボランティア活動にもいかしていきたい。
- 被災地を TV で見るのと自分で見るのでは大分違っていた。実際に被災地を見た後にソーシャルワーカーの話がより鮮明に感じショックが大きかった。2 日目の方に「いつまでも被災者でいられない」と言われ、自分が救われた。
- 人との関わりが大切だと感じたので、自分の地域のコミュニティーを少しでも広げていきたい。
- 被災地を実際に見て、本当に言葉が出なかった。はじめはこのプロジェクトを今後「伝えていかなければ」と使命として感じていたが、今は「伝えなければいけないんだ」と感じる様になった。今後は人との繋がりを大切にしていきたいと思う。
- 学生だから聞けることはありのままに聞き、ワーカーの方にありのままの事を話してもらえて心に響くことだと感じた。今後もありのままの事を伝えていきたいという気持ちが強くある。

＜日本社会事業大学＞

- 被災以前の状況を知り、被害の大きさが分かった。ソーシャルワーカーの話を聞いてソーシャルワーカーについて考えさせられた。
- 人と人の繋がりの大切さや記録を残し後世に伝えていきたいと感じた。
- 視察の際にソーシャルワーカーとしての仕事が分からなかったが、ソーシャルワーカーの

お話を聞き自分なりに色々と考えさせられていい経験になった。

- 以前の被災地訪問でボランティアを行い、自分が何の役に立っているか気になったが、今回お話を聞いて「ボランティアのミスマッチ」について学び印象に残った。
- 被災地に実際に来なければ分からないことや、コラムを見ても被災地に来る前と後では内容の感じ方が違っていたため、自分の感じ方が変わっていたのだと感じた。地域ごとの情報の違いがあり情報確保の方法を確立していくべきと感じた。ソーシャルワーカーは自分の家族の心配をしなければいけないが仕事を優先するという仕事の責任感を知り、自分の中で考え直していきたいと思った。

＜関西福祉科学大学＞

- 震災時に流された家の前で生活して見える方がどんな気持ちでいるのか分からなかった。被災地の方が、少しずつ故郷へ帰りたいと思う気持ちに対して、ソーシャルワーカーとしての目線で考えることが出来た。
- 話を聞いたソーシャルワーカーの方は阪神淡路大震災の支援に参加しなかったが、後々自分が被災者になったことで少し後悔してみえた。こういったワーカーの思いをこれから伝えていきたいと思う。
- 他の学校の人と意見交換することで自分の気持ちや考えが深まっていった。もっとこのような時間を大切にしたいと感じた。
- 報道で見た被災状況は家がぐちゃぐちゃだったが、視察の際には家があったかわからない状況で言葉が出なかった。
- 被災地への派遣に意味があるかが分からなかったが、インタビューした人に「このプロジェクトには意味がある」といわれ自信を持てた。
- ソーシャルワーカーの人が「ソーシャルワーカーは何でも屋だから雑用係と思って欲しい」と言われとても格好良いと感じこの職業に就きたいと思った。
- 色んな「繋がり」があり、ソーシャルワーカーの人が力を発揮するのは繋がりを通して行くのだと感じた。1つ1つのことを大切にしていくことが重要だと考えられた。
- 学生だから出来る視点を見つけ、伝えていく活動をしていきたい。
- インタビューで「もっと繋がりが欲しかった」と言われていて、ソーシャルワーカーは関わりが多くそのなかで頑張っているのではないかと感じた。

各教員から意見を頂いた。

＜関西福祉科学大学　教員＞

- インタビューをすることが目的ではなく、今後インタビューを聞いたことを深めて発信すること。
- 忘れないでもらいたい事が2点ある。1つは「今の気持ち」、ここで感じたことは今後皆さんの原動力になる。2つ目は「ソーシャルワーカーの人たちがどういった活動・気持ちだったか」を、インタビューの時に聞いた内容と、学校で習ったソーシャルワーカーしかできない部分を震災以前も含めて感じ取る必要がある。
- このプロジェクトは継続・可能性が理解でき、皆さんは個人で来たが皆で一緒にやろうという雰囲気がありよかった。
-

＜中部学院大学　教員＞

・　ソーシャルワークは生活をイメージすることから始まるので、たくさん撮った写真などで思いを深めていく。
・　ソーシャルワーカーは「未来へ向けて走るマラソンの伴奏者」という風に聞いたことがある。伴奏者としてのソーシャルワーカーをイメージしてもらいたい。
・　このプロジェクトはまだ続くので、よりソーシャルワーカーが見えてくるので関心は持ち続けて欲しい。

＜日本社会事業大学　教員＞

・　自然を前にした人の弱さと人々の強さを感じ、ソーシャルワーカーの行動、思い、本質に気付いたと思います。そのことをしっかり伝えて欲しい。
・　災害が起きた時に捉えがちだが、災害が起きる地域ではどうなのかということを皆さんと一緒に考えていきたい。
・　イレギュラーとして参加して、できる限りのことは伝え忘れないようにしてきた。

＜淑徳大学　教員＞

・　大学でソーシャルワーカーの仕事を学んできたと思いますが、今回のプロジェクトで枠組みのなかの仕事だけでなく、何もないところから社会資源を作り出していくというソーシャルワーカーの原点を感じたと思います。皆さんの言葉で伝えてください。
・　自分たちが伝えたいことだけでなく、相手の方が何を伝えたいと思って話してくださったのか、今後考え続けてほしいと思います。

＜岩手県社会福祉協議会　昆広都史さん＞

・　皆さんも私が感じたことを感じていたので良かった。
・　皆さんに伝えなければいけないと地域の方も知っている。初めて行く地域でも「繋がり」を福祉以外の建築・経済等からつくっていきたい。
・　皆さんの一番に出来ることは今回感じたことを色んな人に伝えていく。地域の方や私たちも行っていく事を改めて感じた。
・　遠くに避難した当時はここの資源が分からなかったが、その地域の方に支えてもらい「繋がり」ができた。
・　こういった現地で感じたことを伝えて欲しい。

＜遠藤先生＞

・　「ソーシャルワーカーは被災時何も出来なかったのでは無い」ということがしっかり世の中に正しく伝わっていない。それが、このプロジェクトのきっかけ。
・　被災時に資源が無いのではなく、私たちが持つ「人」という資源がある。ワーカーはその資源を使っている。
・　大学で学んだことも大事だが、原点に触れてこれからソーシャルワーカーとして働くことを期待している。
・　このプロジェクトを細く長く続けていき、どんどん忘れていかないように日本全国に発信して行く。少し引きながら出来ることを考えていくこのプロジェクトはソーシャルワーカーとしての仕事である。
・　そこにあった人たちの暮らしに寄り添い再建していく支援の姿を伝え、皆さんが躊躇なく活躍できるように期待している。

所感

この 5 日間を通して学生同士が個々の視点に基づき幅広い意見があった。そういった意見からお互いに気づいたこと・思ったこと・感じたこと・興味を持ったことをより一層整理し深めていけたと思う。このプロジェクトはこれから始まってくるのでここでお互いに整理したことや教員の方からのアドバイスを活かして今後伝えていくことが大切になってくる。

作成者（大学名・氏名）	関西福祉科学大学　西岡なつみ
分類	その他
プログラム名	グループ討議
日時・場所	2012 年 8 月 25 日　いこいの村岩手
講師・インタビュー対象者	

ソーシャルワーカー（SW）のインタビューを終えた翌朝、関西福祉科学大学、淑徳大学、中部学院大学、日本社会事業大学の学生 16 名は今回のフィールドワークで感じたことや学んだことを報告し合った。グループ討議は、各大学の教職員 7 名、社会福祉法人一戸町社会福祉協議会主任の昆広都史氏も交えて行った。

学生Ａは「被災地の現状を実際に見て、想像以上の衝撃を受け言葉が出なかった。岩手県に来るまでは SW の想いを“伝えていかなきゃいけない”と思っていたが、今は自分から“伝えていきたい”と感じている。SW の話を聴いて、人と人とのつながりが大事だと改めて思った。自分は同じマンションの人や地域の人との繋がりが少ないため、これからしっかりとつながりを結んでいきたい」と話した。

学生Ｂは「SW は人を援助していく専門職だが、SW も一人の“人”なのだと改めて思った。ただ SW の仕事は、一人の人として一対一で支援するのではなく、社会資源を使いながら皆で協力し助けていくのだと分かった。今までの自分は教科書の知識にとらわれ過ぎていたが、今回のフィールドワークは“SW とは？”“福祉とは？”と考えるよい機会になった」と話した。

教員Ｃは「最初は“SW は本当に震災のことを語りたいと思ってくださっているのか？”と疑問を抱いていたが、自分たちの持っている力で一生懸命インタビューに取り組む学生、それに対して伝えようとしている SW、そしてそれを伝えなきゃと変わっていく学生の姿を見て、このプロジェクトはとても意味のあることなのだと感じた。資源がないところに入って支援をしていくのが SW の原点であり、大学の授業では伝えることのできない SW の姿である。SW が何を伝えたいと思っているのかを考えて受け止めた上で、自分たちが何を伝えたいのか自分たちの言葉で考えていってほしい」と話した。

昆氏は一戸町社会福祉協議会所属だが、震災後山田町の社会福祉士として働いてきた。何も知らない土地での支援活動に戸惑ったが、とにかくいろんなところに顔を出して人とのつながりを持つ所から始めたそうである。そして「震災での支援した経験、悩んだ経験をこれからの仕事に役立てていきたい。山田町の住民の『自分たちのことを忘れないでほしい』という言葉が忘れられない。勤務としての支援活動は終わったが、今でも定期的に現地へ出向いたり現地の SW と情報交換したりしている。それは今後も続けていきたいし、続けていくべきだと思っ

ている」と話された。

最後に遠藤先生の話の中での「震災直後から今までSWはSWとして支援できたと思う人？」また「SWの話を聞いて私もこんなSWになりたい、SWって面白いと思った人？」という問いかけに、ほとんどの学生が手を挙げた。学生たちはSWの話の中から“SWだからこそ可能であった支援”を見つけ、SWの業務の専門性の高さ、ダイナミックさ、面白さを感じ取った様子であった。学生全員が“地元に帰ったら家族、友人、大学、そして全国にSWの想いを伝えていきたい”という使命感に溢れた表情をしていた。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　小野田優香
分類	その他
プログラム名	グループ討議
日時・場所	2012 年 8 月 25 日　いこいの村岩手
講師・インタビュー対象者	

グループ討議では、今回のプロジェクトを通して自分が何を感じたのか、何を伝えたいのか、実際に見たり聞いたりしたことで胸に残ったこと、考えたことを学生がそれぞれ発表していった。このグループ討議には教員だけでなく、一戸町社会福祉協議会主任である昆広都史さんにも同席していただいた。

学生からは被災地を見て、「テレビで見ていた被災地と実際に行って自分の目で見る被災地では全く違う」や「被災の状況は場所によって一つひとつ違うため、見方を変えるということが大事」「震災が起きた時に見ていたニュースなどが被災地だと思っていたが、実際に行ってみたら草が生えていたりしてよくわからなかった。でも空気は重く言葉が出てこなかった」など被災地に行く前と行ったあとでは被災地の見え方が変わったという意見が多く出た。

私自身今回のプロジェクトで初めて被災地に訪問して、テレビなどを通してみるのと実際に自分の目で見るのでは全然印象が違うということを実感した。ニュースなどで見て想像することもできるが、実際に行って見てみないとわからないことも多くあると知った。テレビでは被害の大きかったところが多く報道されがちで、視聴者はそれを見て被災地というものを想像してしまうが、同じ被災地でも場所によって被害の大きさは全く違う。そのため、地域によって求める支援の内容も異なってくる。しかし、被災者が負う心の傷の大きさは被害の大きさとは比例しないため、被害が小さかったからと言って心の傷もそこまで深くはないと考えてしまうと取り返しのつかないことをしてしまう可能性もある。だから被害の大きさから心の傷の深さを考えるのではなく、一人ひとりの言葉をしっかりと聴き、受け止めて支援していかなければならないと感じた。

また、インタビューをさせていただいて、「ありのままの声というのを他の人にも伝えたい、知ってもらいたいという気持ちが強くなった」や「思ったこと、感じたことを伝えてつないでいきたい」「直接支援することだけが被災地支援ではない。多くの人たちに語っていくことも支援であり、伝えていくことが私たちにもできること」など今回のプロジェクトで自分たちが見て、聞いて、感じたことなどを今後多くの人に伝えていきたい、伝えなければならないという強い思いをそれぞれが持つことができたと感じた。ソーシャルワーカーの活動というのはテレビなどではなかなか報道されず、記録にも残らない。しかし、人々が今回のような大きな災害に遭い、そこから立ち上がり進んでいくためにはソーシャルワーカーは必要不可欠である。そのため、今回のインタビューで聞いたことやソーシャルワーカーの想いを私たちが記録に残し、今後に伝えていかなければならないと感じた。

今回のインタビューでは“人と人とのつながり”が大切だと何度もおっしゃっていた。現代は人とのつながりは希薄化してきてしまっているが、今回の震災では“つながり”があったからこそ助かったという命も多くある。そういったことをこのプロジェクトを通して知り、“つながり”の大切さを多くの人に伝えていくことも私たちの使命なのではないかと感じた。

事前学習の時から“学生だからこそできること”という言葉を何度も聞いてきたが、学生だからこそできることなど本当にあるのだろうかと思っていた。しかし、今回のプロジェクトでソーシャルワーカーにインタビューをさせていただいて、学生だからこそソーシャルワーカーはありのままに話してくださっているということを感じることができた。そして、その言葉や想いをこれから多くの人に伝えていくことも学生だからこそできるものだと思う。人間は忘れてはいけないと思っていても定期的に思い出さなければ忘れてしまう。しかし、今回のような震災は決して風化させてはいけない。風化させないためにも、私たちは今回のことを今後多くの人々に伝え続けていく必要がある。このプロジェクトを通して伝えていくことの大切さを学んだと同時に、ソーシャルワーカーの活動や想いを伝えることがプロジェクトに参加した私たちの使命であると強く実感した。

作成者（大学名・氏名）	文京学院大学　石井友里
分類	座学
プログラム名	宮城県社会福祉士会の取り組み
日時・場所	2012 年 9 月 3 日　東北自治総合研修センター
講師・インタビュー対象者	宮城県サポートセンター支援事務所長　鈴木守幸氏

宮城県サポートセンター支援事務所長、鈴木守幸社会福祉士より東日本大震災における活動についてお話をいただいた。

サポートセンター支援事務所は被災市町の仮設住宅団地 40 ヵ所以上に作られたサポートセンターの後方支援のために作られた。具体的には、サポートセンターが仮設住宅に入居する高齢者、子育て世帯などが安心して生活できるよう、総合相談や生活支援等を行い、サポートセンター支援事務所がその運営の相談やノウハウの提供、スタッフの人材育成などの支援を行うというものだ。サポートセンターは当初、仮設住宅のみに対応する予定であったが、みなし仮設や在宅の被災者にも対応する事となった。

サポートセンターの設置主体は市町村社会福祉協議会が多いが、NPO 法人や社会福祉法人、民間会社の場合もあり様々である。しかし、何を担うのかが明確にされていなかったため、運営はまちまちであった。そんな中でも、平時から地域に根差した活動していたところは比較的スムーズに動けていたそうだ。平時から地域の中に溶け込み、地域の人々とのつながりがあったからこそ出来たことだろう。

座学、インタビューを通して「つながり」というキーワードが多く聞かれた。震災に遭い、避難所や仮設住宅での生活。新しい地域に移り住んだ人もたくさんいるだろう。こうした元々の地域コミュニティが崩壊している状況での支援はなかなか難しいものがあると思う。最近ではお年寄りの引きこもりや孤独死などよく聞かれることだが、平時からつながりを作り、いざという時でも誰かとつながっているということが重要ではないだろうか。

作成者（大学名・氏名）	日本福祉大学　竹倉文恵
分類	座学
プログラム名	宮城県社会福祉士会の取り組み
日時・場所	2012 年 9 月 3 日　東北自治総合研修センター
講師・インタビュー対象者	宮城県サポートセンター支援事務所長　鈴木守幸氏

一日目の座学では、宮城県社会福祉士会　宮城県サポートセンター支援事務所所長の鈴木守幸さんから「サポートセンターを中心とした被災者支援について」レジュメに沿って話していただいた。

現在、サポートセンターは、宮城県内の津波の被害が甚大であった地域を中心として 13 市町に60近く設置されている。サポートセンターは仮設住宅やみなし住宅で生活されている方々の生活支援を中心に行い、高齢者・障害者・生活困窮者等の生活支援も行っている。サポートセンター支援事務所は、60 近くあるサポートセンターの後方支援や被災者支援従事者の人材育成を行う機関として作られた。

被災者支援従事者の人材育成が必要な理由として、社会福祉分野に全くの素人でありコミュニケーションの取り方に戸惑っている支援従事者が存在すること、NPO 法人などで他機関との連携が取れず自己完結型の支援がなされ継続性がないことが挙げられた。

被災直後のソーシャルワーカーは無力で、地域にソーシャルワーカーの顔が見えなかったことは仕方がなかったのかもしれない。そして、混乱状況が続いた中で、ソーシャルワーカーだけではなく多くの職種が同じ現場で、どのような活動をしたらよいのか戸惑ったのではないだろうか。ただその中でも、保健・医療分野は災害時に何をするべきなのか比較的分かりやすかったため、被災地で活動しているということが目で判断されやすかったのではないだろうか。

ソーシャルワーカーは、震災から 2～3 か月経ち落ち着きを取り戻し始めてようやく高齢者・障害者の支援に動きだし、活動が見えるようになってきた。しかし、鈴木さんは、平時から市町村社会福祉協議会等のソーシャルワーカーが、地域住民と繋がりを持っていたら、被災直後から専門性を活かしてソーシャルワーカーとして役割を果たすことができたのかもしれないとおっしゃっていた。

さらに、今回の震災を通して全ての人に「ノーマライゼーション」の考え方が伝わる事が大切であるとおっしゃっていた。鈴木さんは震災支援がノーマライゼーションの視点でおこなわれることが、地域にとって一番必要であると考えておられた。

私は、平時から人々と「繋がり」があることが災害時に、とても大切になるのではないかと考えた。ソーシャルワーカーを含め地域住民一人一人が日頃から地域を大切にし、「顔が見える」存在であることが今後必要になると感じた。

作成者（大学名・氏名）	文京学院大学　榊原香
分類	視察
プログラム名	被災地視察
日時・場所	2012 年 9 月 4 日　宮城県東松島市、南三陸町他
講師・インタビュー対象者	

私たち文京学院大学の学生 4 名と日本福祉大学の 4 名は、午前 10 時頃、車で宮城県東松島市へと到着した。1 時間前に窓から見えた景色は、どこかに消えてしまったかのように、そこには変わり果てた景色が広がっていた。街の道路は舗装されキレイに整えられていたが、少し視線をずらせばここに津波が来たのだと痛感させられた。折れ曲がったガードレールや、粉々に崩れたコンクリート。私たちはその光景に息を呑んだ。車から降り、自分の足で歩き始めた。道のあちこちに津波によって運ばれてきた土砂や破壊された物が散乱していた。破壊された家屋の近くにはたしかにここで人が生活していたということを物語るように、時計や靴や調味料などの生活用品が当時のままそこに残っていた。

東松島市を後にした私たちは南三陸町に向かった。南三陸町は東松島市に比べ、がれき撤去が進んでいるように感じた。車から降りた私たちは、防災対策庁舎に足を運んだ。玄関部分には多くの花が供えられており、震災により人が亡くなったという現実と、今もなお手をあわせに来られる方の存在を目のあたりにした。防災対策庁舎の最上階の部屋にも津波が襲った爪痕があった。3 階ほどもある建物を襲う高さまで波が来るということを、私たちは想像することも出来なかった。津波が来る前、家屋で溢れていたこの街は、今では草が生え、かつてはどのような町並みだったのかが今となっては全く想像できない。まるで街全体の呼吸が止まったかのようで、動いているものが何一つない。

自分の足で歩くことでたくさんの発見があった。テレビや新聞でしか被災状況を目にしていなかった今までは、津波で破壊されたものたちを単なるがれきとしか思っていなかった。だが、一つ一つをよく見て確かめると、家屋のタイルや木材、割れた食器、ボロボロになったぬいぐるみなど私が今使っているものと同じものが集まってがれきとなっていた。崩れてしまったこの街には、人々の生活が確かにあり、がれきと呼ばれている一つ一つのものにはそれを使って

いた人々の想いが詰まっているのだと思うと、それをがれきと呼ぶのは正しくない気がした。今となっては想像できないが、津波が来る前はこの街も人で溢れ、ここでいくつもの家族が暮らし、笑顔で溢れていたということを想像すると胸が痛んだ。私たちはそれぞれに色々なことを感じ、南三陸町を後にした。

翌日、仙台市閖上地区へと車を走らせた。閖上地区は宮城県の中でも被害が大きく東松島市や南三陸町に比べて、何もないという印象は強く残った。車から降りて中学校へ向かった。入口にはたくさんの花とお供えがされており、その横に机が置いてあった。その机には津波によって亡くなったクラスメイトへのメッセージがたくさん書かれていた。そのメッセージを読み自然と涙が溢れた。昨日まで一緒にいて笑って泣いて喧嘩してたくさんの日々を過ごしてきた大切な仲間たちがいなくなってしまうということ、そしてその悲しみを私たちは想像も出来ない。きっとみんな当たり前に明日が来て、当たり前にみんなと会えると思っていただろう。その明日が来なかった。当たり前だと思っていた日々がいきなり終わりを告げた。中学校に残されたたくさんのメッセージを見て涙が止まらなかった。

明日が来ることは当たり前じゃない。今の自分の暮らしを当たり前だと思ってはいけない。そう感じたときに今ある日々や環境、そして一緒にいてくれる仲間、その全てに感謝の気持ちが溢れた。地震の被害がなかった地域では一年半前におきた地震のことなど忘れてしまったかのようになにもなく日々が進んでいる。でも被災地の人々はそうではない。津波に襲われ、家がなくなり、大切な人を失った今でも被災地の人々の生活は続いている。一年半前に起きたこの地震の傷を背負いながらも前を見て生きている。死んだら終わりですか？がれきの撤去が終ればいいんですか？そうじゃない。被災地の人々だけじゃなく、日本に住んでいる全ての人たちがこの地震を忘れてはいけない。東日本で起こったことを忘れてはいけない。今もこれからもずっと私たちは何が出来るのかを考えて生きていく。この日本で起こったことを忘れずに、今出来ることを精一杯やって生きていく。それが未来に繋がっていくのではないだろうか。この被災地でソーシャルワーカーだから出来ること、誰かだから出来ることなんてない。まず人として何が出来るのかを考えることから始まるんだ。そして唯一今私に出来ることあるというならばこのプロジェクトで見たこと、聞いたこと、そして感じたこと、たくさんの人々の声をまたたくさんの人に伝えていくことだと思う。それが今の私に出来ることではないだろうか。今回視察で訪れたすべての街に近い将来笑顔が溢れることを心から祈り、視察を終えた。

作成者（大学名・氏名）	日本福祉大学　上野莉恵
分類	視察
プログラム名	被災地視察
日時・場所	2012 年 9 月 4 日　宮城県東村松市大曲地区、南三陸町
講師・インタビュー対象者	

私たち日本福祉大学の学生 4 名と文京学院大学の学生 4 名は、宮城県東村松市と南三陸町を訪れた。私にとって、実際に被災地に訪れるのは初めてである。

はじめに、東村松市に行き、その中でも大曲地区を訪れた。大曲地区では、海から近く、住宅街でもあり、港町でもあるとみてとれる。東日本大震災が起きてから約 1 年半経つと、草などが生えていた。あたりを見回すと、津波に何とか耐えて残っている家が転々とあった。しかし、震災から 1 年半経っても家の中は泥で埋まっており、もとの生活を送れる状況を作るのにはまだ時間がかかりそうである。テレビでは船などが街に流されている映像を見たことがあったけれども、今は船や他の大きな瓦礫は撤去され、綺麗にされていた。今でも瓦礫の撤去が行われている。海岸沿いの奥を見ると、多くの瓦礫の山が見えた。それを見て、津波の恐ろしさがとても伝わってきた。また、ところどころに、目覚まし時計などがあり、当時の地震や津波が起きた時刻に止まっている状態であった。大曲地区を訪れて、これから少しずつ復興していくために、ソーシャルワーカーとしてどのように動くことが重要か考えた。

東村松市大曲地区を後にし、南三陸町に向かった。はじめに、南三陸町さんさん商店街を訪れた。南三陸町さんさん商店街は、仮設住宅でできた商店街で、少しでも明るく、地震が起きる前の時と同じように活気のある町にしたいということから始まったそうだ。多くの地元の住民や観光客がおり、震災の後も地元の住民は笑顔で明るい雰囲気であった。商店街を後にして特に被害を受けた地域を訪れた。大曲地区と同じように、津波の影響で多くの被害や犠牲者がでた。あたりを見回すと、さら地の状態であることがとても印象的だった。大曲地区の時と同様に、被災する前は家やお店がたくさん建っていて、近所の人との会話や子どもたちが元気よく遊んでいるなどにぎわっていたと思う。ここで多くの命が失われるとは誰も思わなかったことだろう。これからソーシャルワーカーには、住民や他の専門機関との連携をとりつつ、今抱えている課題をどうするべきかを把握し・働きかけていくことが必要不可欠であると考える。

被災地を訪れて、震災が起きてから 1 年半が経過し、特に被害を受けた地域に対して、まだもとの生活が戻るまで時間がかかり、多くの課題が残っていることを知った。多くの課題を少しずつ解決していくために、今のわたしたちは何ができるであろうか。そう考えるにつれ、無力であると感じた。しかし、今の状態では無力であっても、

少しでも早く住みやすい環境を作り上げるために、ソーシャルワーカーは専門機関や住民とのつながりを通して日々、まちづくりに取り組んでいると私は考える。

作成者（大学名・氏名）	文京学院大学　木村恵理
分類	インタビュー
プログラム名	仙台市向陽台地域包括支援センター
日時・場所	2012 年 9 月 5 日　宮城県仙台市泉区
講師・インタビュー対象者	所長　浅倉恵子氏

仙台市向陽台地域包括支援センターの所長である浅倉恵子さんにお話を伺った。

【ソーシャルワーカーの紹介】

浅倉さんは福祉大学を卒業後、特別養護老人ホーム、重症心身障害者施設コロニー、授産施設などの職員を経た後、平成 8 年に社会福祉士の資格を取得し社会福祉士会に入会した。高齢者施設での相談員を経て平成 22 年から現在に至るまで向陽台地域包括支援センターで社会福祉士として活動されている。当地域包括支援センターは、平成 21 年 4 月に開所し、向陽台中学校区（5 地区）担当している。

【インタビューをしてわかったこと】

①震災直後から

センターが設立して 2 年目の年に今回の震災が起こった。地域支援として、まず行ったこととして担当区域の高齢者の方々、主に独居の方約 80 名の安否確認をしてまわった。利用者の方にはケガをした人はいなかったが、自宅が半壊・全壊した方がいた。水道は断水（1 週間で復旧）、電気は停電（5 日目復旧）、ライフラインが止まっている間も通常どおりセンター業務を行った。要援護者の方の確認については、町内会長や民生委員、社会福祉協議会の方々と情報を共有しながら支援にあたった。食料は自宅で備蓄していたものや支援物資を個別訪問して配布した。

②仮設住宅、避難所へ移行後

地域で半壊した方の避難所への訪問や、自宅で生活が困難になった方の生活の場の確保のため、関係機関や家族との連絡調整を行った。

沿岸部では自宅が半壊、全壊などの大きな被害があったので、社会福祉士会からの要請で雄勝町や石巻の避難所や仮設住宅を回り、地域やそこで生活する方がどのような状況なのかを一軒一軒訪問して聞き取りをした。津波で被災して連絡も取れない牡鹿までいき、保健師と一諸に避難所で孤立しているお年寄りの支援の方法がわからないとの相談があり、対応にあたったこともあった。

また、地域の住人の方々が避難所へ移行した後、障がい者の方々（精神障害、視覚障害、身体障害者の方々）の在宅で生活している状況を知ることができず、中期の支援としてもこのよ

うな方々への支援はなかなか行き届かない状況が続いていた。さらに、避難生活をしている住人の方々の声として、集団生活しているうえでのストレスやこれからの生活への不安などがでてきて、体調の不調を訴える方々がでてきていた。（保健師さんへ報告、繋ぐ）

③震災支援後期

被災された方がどんな援助が受けられるのかなどの情報発信を行った。援助を受けるための申請（罹災証明や罹災証明書発行後の免状申請手続き）などを自分一人で行うことが難しい方については、一緒に同行して申請をした。しかし、前述したように障がい者の方々の中には受けられる援助が限られていたり把握されないため、民生委員に「食べ物がなくて困っている」などの訴えをされる方もいらっしゃったという。震災を受けてそれぞれの地域で避難所のあり方や要援護者の方の避難方法、安否確認、物資の配布や支援の仕方など課題が出てきていた。地域ケア会議では、震災をテーマにして、自分たちで震災から学んだこと、自分たちに何が出来るか、何が大切かをテーマにしてグループ討議をして今後に活かしていくことを確認した。

【インタビューを終えて感じたこと】

今回、浅倉さんにお話をお聞きして感じたことは、まず震災直後の支援では「ソーシャルワーカーだから何をする」など、そういうことではなく、「一人の人間としてまず何をするのか」ということが大事であると分かった。また、地域の住人の安否確認をしたお話の中から感じたことは、ソーシャルワーカーは震災以前からの地域の住人、町内会長、民生委員、社協など様々な人とのつながりがあったからこそ安否確認などの情報を集める時にも力を発揮することができたのではないかということである。そして、包括センターが繋がるだけでなくそれぞれを繋げる役割を担っている事を教えられた。専門職であることから高い技術を使い支援して行くということ以外に、「人とのつながり」からそれを生かして支援にあたっていくことは、ソーシャルワーカーだからこそできることではないかと感じた。

また、被災された地域の中での人と人とのつながりの深さについても知ることができた。地域によっては、お風呂に入れない方にはプロパンガスのお風呂を使用することのできる家庭や、施設が自分のところのお風呂を開放したりするなど、街全体が絆を深めて行くことによって乗り切れた危機というものがあったのではないかと感じた。

作成者（大学名・氏名）	日本福祉大学　星野真希
分類	インタビュー
プログラム名	せんだんの里
日時・場所	2012 年 9 月 5 日　宮城県仙台市青葉区
講師・インタビュー対象者	副施設長　千脇隆志氏

私たち日本福祉大学は、仙台市青葉区にある社会福祉法人東北福祉会せんだんの里、副施設長の千脇隆志さんにインタビューを行った。せんだんの里は特別養護老人ホーム 150 名、ショートステイ 50 名、デイケア 10 名～30 名という大きな施設である。仙台市青葉区は内陸部であるため津波被害はなく、地震による被害だけであった。千脇さんは平成 13 年からせんだんの里でソーシャルワーカーとして働き始めた。

震災が起きてから、電気・ガス・水道といったライフラインが途絶えてしまい、一番早く復旧した電気が通ったのも 3 月 14 日であった。それまでの間は携帯用発電機や夏祭りに使用する電球などを使って光を集めていた。次に水道が復旧したのが 3 月 18 日。水道が使えなく困ったのはトイレである。幸いお風呂に水を溜めていたため、その水を使用して流していた。飲み水は 3 日分確保されていた。都市ガスが復旧したのは 4 月 14 日。せんだんの里は暖房機にガスを使用していたため、低体温などで人の対応に困った。応急措置としてペットボトルで湯たんぽをつくって寒さをしのいだ。またガソリンがなくなってしまったことにより、移動手段がなく動きがとれなくなった。震災時、千脇さんは認知症ケアの研修を行っていた。大きな地震が 2 回起き、千脇さんは「もうおわってしまうのかな」と思ったという。しかし副施設長という立場上、職員にも利用者にも不安を与えないように冷静になるように努めていたそうだ。さいわい職員も利用者もパニックになるようなことはなかった。職員は自分のことよりも家族のことを真っ先に心配していたという。地震だけで津波による被害はなかったために冷静さを保っていられたのかもしれないとおっしゃっていた。千脇さんは地震が起きてまっさきに状況確認を行った。建物は壊れていないかどうか、生活はできるのか。ライフラインは止まっていないかどうか。被害の状況はラジオで確認した。そして状況確認と並行して、地域に住む被災された方が避難してくる可能性もあったため、施設に泊まれるような状態を作った。また行政機関や地域包括や障害者関係の施設であったり、町内会というような所と連携を取ってつながっていった。震災時の職員体制は、まずその場にいる職員たちの勤務を考えて今日は施設に泊まることができるかどうかということを確認し、その場にいない職員に対しては安否確認をおこなった。震災の前から、施設としての最低限の規定として避難訓練はしており、防災マニュアルもあった。しかし職員によって認知度に差があり、防災マニュアルに沿って対応をしていた職員もいれば、防災マニ

ュアルの存在すら知らないといった職員もいた。それが現実であったそうだ。“知っている”と“できる”とは違うのだと千脇さんはおっしゃっていた。震災直後は職員も利用者もそれぞれに不安を抱えていたが、支えあいながら震災後の日々を過ごした。

震災から半年ほど経つ頃になると、衣食住に関する最低限の支援などできることに焦点をあてて支援をしていった。そしてライフラインも復旧と共に支援の在り方も変化していき、最低限のケアや食事も通常のものに戻していった。しかしこの中期になると、職員の不満など初期とは違った問題も出てきた。そして家族が亡くなってしまったり家が流されてしまった職員などに対する心的ケアという課題も出てきた。またせんだんの里はそれほど大きな被害を受けなかったために、石巻の避難所へ支援に行ったり、職員が個人的に介護福祉士会などの団体に入っているためボランティアとして参加したり、仕事として沿岸部へ行かせるなどということもした。

ソーシャルワーカーとしてこういった場所で活動する上で大切なのは、現状をキャッチすることであり、ネットワークをしっかりと把握してつなげられる力を持つことであると千脇さんはおっしゃっていた。そしてこれからはボランティアなどにすべてを頼り生活をするのではなく、住民たちの力で復興に向けて進んでいくことが大切になるのではないかと語ってくださった。そしてこれからのことについて質問をすると、被害の状況は様々かもしれないけれど、そんな地域としっかりとつながりを持っていきたいと思う。それに人それぞれに震災に対して苦しい思いがあったりするかもしれないけれど、とにかくこの震災を忘れることがないようにしたい、と語ってくださった。

インタビューに答えてくださった千脇さんのお話や姿から、ソーシャルワーカーとしての強さと優しさを感じ、私もこんなソーシャルワーカーになりたいと思った。そして、この震災を絶対に忘れてはならないと改めて感じた。

作成者（大学名・氏名）	文京学院大学　棚田恵里花
分類	インタビュー
プログラム名	多賀城市役所社会福祉課障害福祉係
日時・場所	2012 年 9 月 6 日　宮城県多賀城市中央
講師・インタビュー対象者	副主幹　小林紀代氏

私たちは、宮城県多賀城市役所 社会福祉課 障害福祉係の副主幹である小林さんのお話を伺った。

多賀城市は震災の被害がとても大きな町だった。市役所の職員は、震災時の対応すべき場所として担当が決まっており、小林さんの担当は近くの市民体育館での支援だった。しかし、震災発生当初、別の施設で仕事をしていた小林さんは、担当である市民体育館にすぐには向かえない状況であった。長靴がないため、津波でできた道を踏んで、足を濡らしながら町内を移動し、ようやく津波の被害の少なかった市民体育館を避難所として開放し、使用することになった。しかし、体育館は窓ガラスなどが割れ、使えるのはロビーくらいだったそうだ。体育館は、びしょぬれになりながら避難してくる人々で大混乱だった。夜になると、被害に遭い亡くなった方々の遺体を避難所の一角に安置することになった。安全のため、体育館の割れた窓ガラスを撤去し、避難所の人々がパニックにならないように安置場所の目隠しもした。そのときのことは忘れたい記憶として、小林さんの中に残っている。

震災から少しずつ日が経ってくると、体育館に避難してきた人たちや他の避難所から尋ねてきた人たちからの質問や相談が多かったという。しかし、誰がどこに避難しているか、食料などはどうなっているかなど、小林さんの耳に情報は入ってきておらず、質問には答えきれなかった。

多くの人たちと一緒に生活をする避難所の困り事として、まずはトイレが問題であった。トイレの使い方を正しく守らない人がいるために、トイレに対する苦情が絶えなかった。そこで、小林さんはどうしたらみんなが気持ちよく使えるか、トイレの使い方に対する意識を高められるかを考えた。その結果、トイレが使えなくなるとどうなるか、生活におけるトイレの大切さを説明し、避難してきている人たちを 3 つのグループに分け、当番を設定した。もちろんトイレ掃除なども自分たちのグループ内で行うようにした。みるみるうちにトイレに対する苦情はなくなった。量が限られている食料も、グループ内で分けるようになった。

震災後、被災者に対し早期に対応するため 4 月 1 日から市役所で総合窓口をスタートさせた。仮設住宅についての説明や多くの人々の悩みや苦情を受け続けた。今回のような大きな地震は前例がないため、職員側も大混乱だった。ガソリンが足りない状況の中、車を使用したいすべての人にガソリンを配ることはできなかった。持病などで、本当に必要としている人には許可

証を発行し、ガソリンを配給した。介護が必要な人もいた。ヘルパーは業務を休止していたため、市役所の車で空きがある施設に送った。市民の人たちの相談や要望などは相談システムを使った。前回この人はどのようなことで市役所に来たのかなどをシステム化することにより、次につなげやすくなった。

今年の４月から、市役所も通常業務に戻った。しかし、未だに自宅に戻ることができず、避難所や仮設住宅に住み続けている人々もいる。そのような人たちの中には、避難所の生活が当たり前になってしまった人もいる。市役所の職員たちからの見守りや食事などが出るからである。小林さんはそのような状況に対して、避難所の生活が当たり前になってはいけない。なんでもしてあげることは、その人たちの自立を妨げてしまうことになってしまうからと強く話してくれた。

失ったものの多い震災だったが、震災の影響により、よい方向に動いたこともあった。今まで引きこもりだった人が震災をきっかけに外に出ざるをえなくなり、その結果、状況が変わった。さらに、就労に励む姿が見られた。また、精神に病気を抱えていたがそれを隠し続け、病院に行かずに過ごしていた人が、今回の震災をきっかけとし、自分の病気に合った病院に行くことができたなどと、プラスの出来事もあったという。「ピンチはチャンス」と小林さんは言っていた。

小林さんにとってのソーシャルワーカーとはどんな仕事であり、存在か？という質問に、「ソーシャルワーカーという資格を持った人が、ソーシャルワーカーの資格の意味を作り上げるもの。一人ひとりが、自分の役割をどのように使っていけるか」だと答えてくれた。

【所感】

被災して１年半。だんだんと風化されてきているのが現状だ。しかし、被災地はまだ被災地。今頃になってやってくる苦しみや悲しみもある。大震災が起き、多くの人々の生活が変わり、多くの人々の命が失われた。そのことは、いつまでも忘れてはいけない記憶だ。

作成者（大学名・氏名）	日本福祉大学　鈴木秀明
分類	インタビュー
プログラム名	泉区中央地域包括支援センター
日時・場所	2012 年 9 月 6 日　宮城県仙台市泉区
講師・インタビュー対象者	西澤英之氏

1.　ソーシャルワーカー西澤さんの経歴、職場

今回、仙台市泉区中央地域包括支援センターの西澤英之さんにインタビューを行った。西澤さんは、平成 18 年から地域包括支援センター(以下、包括センター)に勤務。勤務形態は、主任ケアマネジャー・社会福祉士・保健師・センター所長の職員 4 人で成り立つ。主な業務は総合相談、権利擁護、包括的・継続的ケアマネジメント、介護予防の 4 つの活動を行っている。その中で社会福祉士は総合相談、権利擁護を中心に活動している。また高齢者全般の健康関連、福祉サービス利用相談を行っている。

2.　泉区の被災状況

泉区の被害状況として、泉区では震度 6 弱の地震が襲った。幸い津波被害はなかったが、タンスが倒れ、あらゆる家の家具が落ちてきた。屋根のかわらが落ちる、一部で今の家で生活できない人も出ていた。また水道・ガス・電気などのライフラインが止まってしまったことがあらゆる問題をもたらした。揺れ直後から停電となり電気が使えないことで連絡手段が途絶えてしまった。携帯電話はかろうじて時々つながる状態であったがうまく機能しなかった。さらに、正確な情報が住民に届かなく、誤った情報により不安・混乱を招いたこともあったようだ。ガソリンの不足により移動手段がない、さらには生活を維持していくための水・食料が供給されるまで時間がかかった。特に近所の食料品店が長蛇の列になるぐらい食料、飲み水が不足していた。普段の生活とは、かけ離れたものとなっていった。

3.　ソーシャルワーカー西澤さんの動き

西澤さん自身被災当時、民生委員に講演を行っている最中であった。その中で今までに経験したことのない地震が起こり「これはただ事ではない」と思い、その場にいた民生委員と確認を取り合いすぐに泉区内の安否確認を始めた。被災直後は約 16 か所を自らの足でまわり、次の日も引き続き安否確認を行っていたそうだ。

その中で民生委員と協力をしながら戸別訪問し相談を受けていた。その中で効果的に利用されていたのが、安否確認リストであった。震災が起こる前から、事前に安否確認リストを作っており、住民 1 人ひとりランク付けし優先順位を決める(S～C)。支援の緊急性が高いと予測されるところから相談していく仕組みを事前に備えていた。

しかし、問題がひとつ解決すると新たな課題が生まれる。高齢者の居場所の問題、認知症のケア、仮設住宅の入居など安心が確保されると新たな不安が襲ってくる。高齢者の居場所では、高齢者の中で急激な環境の変化により、環境になじめない人が出てきた。さらに、生活リズムが崩れたり、安心して眠れなかったりと健康状態の悪化があり、見える被害よりも見えない被害の方が深刻であった。そのひとつとして仮設住宅の問題が挙げられる。家であるが家でない環境に住民のイライラは溜まっていった。壁が薄くて話し声が聞こえてしまう、それによってのトラブル被害が民生委員・包括センターに相談として持ちかけられたこともあった。

また助けるといった視点では同じ目的であるのに、行政と包括センターの食い違いがあり、適切な支援をすることが困難であったという。例えば、Aさんを福祉避難所に入所させたいと思っていても同意がとれないために動くことすらできないもどかしさがあった。

社会資源に目を向けると、包括センターはフォーマルな部分の関わり合いはもちろんあったが、インフォーマルな部分に“ラーメン屋のおじさん”が挙げられた。住民に食料の配給や声掛けを進んで行っていた。こういった住民同士の支え合いは泉区では多かったようだが、それだけでは支えきれない部分もあった。

4.　西澤さんの“声”

震災時にはどのような支援が必要かと聞いたところ、「強く思っていたのが二次災害を出さない支援をするということ、自分の地域で死者をだしたくない。」と述べた。起きてしまったことを考えるよりこれからのことを考えていく視点を持ち素早く対応していた。その対応についても、普段の生活の中の業務がしっかりしていれば活動できると強く言った。日頃からの積み重ねが大きな資源になる。

震災直後の状況を聞いていた時、西澤さんがぼそっと言ってくれた。「古い建物の中で大勢の民生委員がいる中で自分だけが逃げるわけにもいかなかった。」一見聞くと、その場から逃げようがない環境だったから、ととらえてしまうかもしれないが、最後まで話を伺うとそのようなことはなく責任感、使命感を持ち住民に寄り添っていたのだと強く感じた。しかし、その言葉を言う背景には地震の恐怖、不安を物語っているともいえる。

最後に西澤さんは、高齢者や障害者の権利について語ってくれた。「このようなときこそ(深刻な被災状況下)、権利を主張できない人の権利を擁護していくことが求められている」声を出しても届きにくいそのような人たちの権利を主張してこそのソーシャルワーカーであると言われた気分であった。

このような力強い言葉を聴くことができ、今回ソーシャルワーカーの必要性を見ていくことができた。外的な損傷を治すわけでもない、目に見える支援でもない。それでも必要とされていたソーシャルワーカー。その中で“寄り添う”というキーワードがでてきた。なにも近くに居るだけではない、制度だけを提供するだけではない複雑な距離をソーシャルワーカーだからこそ対応することができる。何事においても人の生活を考えていけるソーシャルワーカーが求められていると強く感じる。

作成者（大学名・氏名）	日本福祉大学　竹倉文恵
分類	その他
プログラム名	グループ討論
日時・場所	2012 年 9 月 7 日　東北自治総合研修センター
講師・インタビュー対象者	関西福祉科学大学　遠藤洋二氏

『ソーシャルワーカー“声”プロジェクト』最終日は、1 日目の座学から 2 日目の被災地の視察、3、4 日目のインタビューの振り返りを行った。両チームからそれぞれ 1 名ずつ活動から感じたことや考えたことを出し合った。

まず、実際に被災地に視察に行き、津波よって一瞬にして人の命が奪われたと実感し、大きな衝撃を受けた。そして、私たちに今できることは、大きな支援はできないけれど、時間が経つと共に 3・11 の事が風化されつつあるなかで、今回見たことや聴いたことを私たちが「忘れない」ということ、そしてどんなに小さなことでも「伝えていく」ことだと思った。

また、1 日目の座学で、鈴木さんがおっしゃっていたように「繋がり」が災害時には、より大切になるということが、3、4 日目のソーシャルワーカーの声からも伝わってきた。「繋がり」は情報共有や支え合いの役に立ち、地域住民を安心させるものになる。ソーシャルワーカーだけでなく地域住民一人一人が住民と関係を持ち、繋がっていてほしい。そして繋がりを作っていくこともソーシャルワーカーの役割なのではないだろうか。また、災害時に仮設住宅で新しい人たちと出会うなかで「繋がり」は更に必要になる。その時こそ、近隣住民同士を繋げ合うサポーターとしてソーシャルワーカーの力が必要になる。そして、ソーシャルワークがソーシャルワーカーだけのものになるのではなく、誰もが使えるツールとなることが望ましいのではないだろうか。

ソーシャルワーカーに「現場経験が大切」と言われているが、この 5 日間を通して、現場経験だけがすべてではなく、感受性を豊かにし、クライエント一人一人に寄り添う支援をすることが一番大切になるのではと考えた。時が経ち、被災者の思いは心のもっと奥に沈みこんでいってしまっている気がする。心の奥に隠されてしまった気持ちを「見える化（可視化）」させていくことが今後必要になると感じた。今回の宮城県のプロジェクトに参加した 8 人それぞれが、この 5 日間で様々なことを感じ、そして考えてきた。　被災直後、ソーシャルワーカーの顔が見えなかったと批判されていたが、視察やインタビューを通して、ソーシャルワーカーは、しっかりと機能していたということが、わかった。そして、インタビューしたソーシャルワーカー

をかっこいいと感じ、今回出会ったソーシャルワーカーのように冷静で、どこか強さを感じるワーカーになりたいと８人全員が思えた。このように思えたことがとても大切なことであると私は感じている。このプロジェクトに参加して本当に良かったと思う。

関西福祉科学大学

白鳥実葉

　ソーシャルワーカーの力強さを知りました。カッコいい、魅力ある仕事だと感じました。
日本ではあまり表に出てこないソーシャルワーカーの頼れる働きを伝えて行きたいです。

西岡なつみ

　震災による痛みは当事者にしか分かりませんが、支援活動を行ったソーシャルワーカーの視点や行動から、気づき・学んだことを今後の災害支援に役立てていくことは可能であると考えます。自分には今何ができるのかを考え続けることが重要だと感じました。

古根川和貴

　この活動は何もかもが初めて見る光景ばかりで衝撃的だった。自分が生きていることに感謝し、これから生きていく上で、このことは広めていかなければと感じました。

辻　佑佳里

　今回のプロジェクトを通してソーシャルワーカーになりたいと改めて思いました。今までに関わったことのない方たちから色んな話を聞けたことで、自分の中の福祉観が変わりました。

淑徳大学

安川紗代

今回のプロジェクトに参加することができて、被災地のソーシャルワーカーの声をたくさんの人に伝えたいと強く思った。今回の貴重な経験をこれからの大学生活に生かしていきたいと思う。

小野田優香

普段の生活では出来ない、貴重な体験をすることが出来ました。今回得たことを色んな人に伝えていきたいと思います。

大木達也

淑徳大学のボランティアセンターに所属しています。今回の岩手での活動で、被災地の回復できている面と、まだ未回復な面を見ることが出来ました。これからの活動に繋げていきたいです。

桝田綾子

今回、プロジェクトに参加させていただき、とても勉強になったと同時に、自分の価値観を考えさせられ、糧のひとつにもなりました。今後は、被災地に行った経験を存分に活かしていきたいです。そして、この報告書を読んで、被災地の現状や今後の課題を少しでも多くの人間(ひと)に知ってもらいたいと思います。

中部学院大学

石川智也

マスメディアを通じてでは知りえなかった震災のこと、被災地の状況、そして大学の講義だけで学び得なかったソーシャルワーカーの活躍について知ることができた。被災地での初めての体験の連続で、戸惑いの気持ちや何とも言えない気持ちがこみ上げてきた。そんな中でのインタビューを通してわかったソーシャルワーカーの思いというのをしっかりと感じ取り、自分にできる自分なりの活動を行っていけたらと思う。

廣野美月

岩手県の被災状況は津波や火災が中心で、ほとんどの方が住む町や家をなくした方が多く存在した。その中で社会福祉士は、高齢者や知的・身体障害者の方たちが仮設住宅で少しでも生活しやすいよう調節したり、周りの環境を整えたりと、不安を抱えている方の生活に寄り添いながら活動を行っていた。どんなに時間が経っても現地の方にとってこの震災は忘れられない出来事なので伝えていくことが大切だと感じた。

古川友子

情報がない。家族の安否もわからない。そんな苦しい状況の中で、目の前にある「今」できることに、必死に取り組んでこられたワーカーさんの想いに触れ、この想いを、ソーシャルワーカーになるために勉強している人、ワーカーとして働いてみえる人、ソーシャルワーカーを知らない人、いろんな人に聞いてもらいたい、知ってもらいたいと思いました。

小川侑希

2人のソーシャルワーカーの方のお話を聞き、お話をしてくれた方は、「何もできなかったと」言っていたが、実際は本人も被災している中で誰がいるのかの名簿作りや地域の方の声を聞くといった支援をしていた。被災時に寄り添っていく「繋がり」を強く感じた。「この繋がり」を多くの人が被災地の事を忘れぬようにしてきたいと感じた。

日本社会事業大学

野澤千明

今回の被災地訪問は、私にとって5回目の訪問でした。震災から1年以上経った被災地を見て、「変わったな」「変わらないな」と多くを考えさせられました。これからもこの経験を忘れず、多くの人に伝えていきたいと思います。貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。

佐藤茉奈

お話を伺ったソーシャルワーカーの方の「忘れないでほしい。伝えていってほしい。」というメッセージから継続することに意味があるのだと感じ、これからも自分なりに被災地を考え、伝えていきたいと思いました。

飯田祐貴

私は今回ワーカーの話を聞いてきて、いざという時、命を守るということが大切であると感じた。命を守るということを根本に持ちながら、働けるワーカーになりたい。

中橋欣子

私は今回のプロジェクトでSWの原点なるものを学びました。それを教えてくださった現地の方々に学生の立場でできることは伝えること、つなげることです。現地でなくてもできる災害支援を東京で広げたいと思いました。

日本福祉大学

上野莉恵

今回のプロジェクトに参加して、地震が起きた際にソーシャルワーカーが取った行動などについて、住民や他の専門機関との連携・つながりがとても重要であると改めて感じた。災害後の支援について、私たちができることは何かについて考えていきたい。

竹倉文恵

平時からの繋がりは、とても大切で、どんなときにでも役に立つと感じた。被災地に足を運び、感じたことを大切にして、災害時に地域住民としてできることを、そしてソーシャルワーカーとしてできることを日々考えていきたい。

鈴木秀明

そこにある現実を受け入れることができないまま被災地で過ごしてしまった。しかし、その中で力強く活動していたワーカーの人の力、つながりというものを強く感じた。いずれその力の一部に私はなりたいと思う。

星野真希

今回このプロジェクトに参加し、本当に貴重な体験をすることができました。実際に被災地に足を運び、ソーシャルワーカーの声を聴いて、私たちに何ができるのだろうと改めて考えさせられました。そして、震災を忘れてはならないと思いました。

文京学院大学

木村恵理

今回被災地を訪問して被害の大きさを目の当たりにした。テレビや新聞で知る以上の衝撃を受けた。そんな中で私たちにできる支援を考えた時、できることは限られてしまうけれど、まずは震災を風化させないために伝えて行くことだと感じた。

石井友里

私は今回のプロジェクトで初めて被災地を訪れ、その状況に圧倒されてしまいました。テレビで報道されなくなったからと言って、終わってしまった事では無いのだと改めて感じました。

榊原　香

今回このプロジェクトに参加し、自分の目で被災地を見て様々なことを感じることができました。また、夢でもあるSWの方の貴重なお話も聞くことができ、自分にとって大きな経験になりました。今回学んだことを今後に活かしていきたいと思います。

棚田恵里花

今も被災地は被災地で、他の地方にいる人たちからは忘れられてきているという現実を実感しました。そして、自分たちの無力さも痛感し、何度も涙を流しそうになりました。けれども、声プロジェクトに参加をして良かったと心から思います。これからも、被災地の現実を忘れずに、そしてたくさんの人に伝えていくことをしていきたいです。

松本歩未

半年ぶりに被災地を訪れ、あの日たくさんの人が走った道を歩き、様々な思いが巡りました。インタビューでは、ソーシャルワーカーとしての強い志と、培ってきた経験を通して今回の震災時にも活躍された方のお話を聞き、ソーシャルワーカーの専門性を学ぶことができました。この貴重な経験を伝え、自分のこれからに活かしていきたいと思います。

望月麻結

2回目の参加となりましたが、今回もとても良い体験だったと感じています。普段は見れないソーシャルワーカーの姿を見て、わたしは素直に「かっこいいな」と感じ、こうなりたい！と思いました。そしてこれから先もこの経験を大切にしていきたいと思います。

あ と が き

平成24年3月にパイロット事業として、2大学3チームでスタートさせた「ソーシャルワーカーの”声”プロジェクト」も、今回はフィードワークの範囲を宮城県・岩手県の２県に広げ、６大学の学生・教職員が参加し実施することができました。

パイロット事業（第1次派遣）の時には、沿岸部にはまだ大量の瓦礫が残され、津波の爪痕の生々しく、視察先の光景に参加した学生は圧倒されていました。震災から1年半が経過した今回は、瓦礫の山は撤去され、津波も後には何もない空き地が広がり、遠くからでは静謐な空間を目にするだけでした。それでも学生は、そこでかつて暮らしていた人々に思いを馳せながら時間をかけて歩き、人々の痛みや悲しみに近づこうと努力しました。

ソーシャルワーカーへのインタビューでは緊張しながらも、第1次派遣の成果を踏まえ、学生なりの健闘をしたと思います。

本プロジェクトの意義は、自らが被災しながらも災害直後から支援活動を行ってきたソーシャルワーカーの活動を記録し広く社会に発信する、「残すこと」と「伝えること」ですが、そのプロセスにおいて学生の成長は目を見張るものがあります。

地震大国の日本において、いずれはまたどこかが大地震に襲われることは避けられません。このプロジェクトに参加した学生が、その際にソーシャルワーカーとして中核的な役割を担ってくれるものと期待しています。

学生に「ソーシャルワークとは何か」を問うと、判で押したように「資源とクライエントをつなぐこと」といった答えが返ってきます。たしかに、それはソーシャルワークの一つの機能であることは間違いありませんが、資源が失われた被災地では何ができるのでしょうか。資源がなければソーシャルワークは無力なのでしょうか。

被災地のソーシャルワーカーは、資源が失われた災害直後においても、その専門性を生かした支援を行ってきたものと私たちは考えています。それが何なのかは、学生たちが掴みとろうとしています。

今、「災害ソーシャルワークとは何か」といった議論が盛んになってきました。プロジェクトに参加した教員が、「災害ソーシャルワークには、ソーシャルワークの原点が見えるような気がします」とプロジェクトの最後でおっしゃいました。正にその通りではないかと思います。

本プロジェクトを続ける中で、私たちなりの「災害ソーシャルワーク」を体系化できればとも思っています。

最後になりましたが、このプロジェクトを「一緒にやろう」と言っていただいた宮城県社会福祉士会、岩手県社会福祉士会の皆さま方に心からの御礼を申し上げます。

福祉系大学経営者協議会復興支援委員長（関西福祉科学大学）　遠藤　洋二

第 2 次派遣　メンバー

大学名	学年	氏　名	備　考
関西福祉科学大学	教員	遠藤　洋二	復興支援委員長
	教員	松宮　満	
	教員	家髙　将明	
	4 年	西岡　なつみ	
	3 年	古根川　和貴	
	2 年	辻　佑佳里	
	2 年	白鳥　実葉	
淑徳大学	教員	伊藤　千尋	
	3 年	小野田　優香	
	3 年	安川　紗代	
	2 年	大木　達也	
	2 年	桝田　綾子	
中部学院大学	教員	大薮　元康	
	3 年	石川　智也	
	3 年	小川　侑希	
	3 年	廣野　美月	
	2 年	古川　友子	
日本社会事業大学	教員	菱沼　幹男	
	職員	廣江　真也	
	職員	谷澤　康之	
	4 年	野澤　千明	
	2 年	飯田　祐貴	
	2 年	佐藤　茉奈	
	2 年	中橋　欣子	
日本福祉大学	教員	原田　正樹	
	職員	伊藤　亜希子	
	職員	森田　健二朗	
	3 年	鈴木　秀明	
	3 年	上野　莉恵	
	3 年	竹倉　文恵	
	3 年	星野　真希	
文京学院大学	教員	山村　睦	
	教員	鳥羽　美香	
	職員	加藤　弘美	
	4 年	松本　歩未	
	4 年	望月　麻結	
	3 年	石井　友里	
	3 年	木村　恵理	
	2 年	榊原　香	
	2 年	棚田　恵里花	

福祉系大学経営者協議会
ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト
第2次派遣

平成25年3月
プロジェクト事務局　関西福祉科学大学
〒582-0026　大阪府柏原市旭ヶ丘3丁目11番1号
ＴＥＬ：072-978-0088(代)
ＦＡＸ：072-978-0377(代)